

# 学内広報

for communication across the UT



特別記事：

役員紹介・卒業式  
学位記授与式・総長賞

平成18年度役員を以下のとおり、紹介します。

総長

小宮山 宏

(任期) 平成17年4月1日～平成21年3月31日

理事(副学長)

西尾 茂文

(担当) 財務 施設・キャンパス 病院・保健センター  
総合研究博物館

(任期) 平成17年4月1日～平成19年3月31日

理事(副学長)

古田 元夫

(担当) 教育 入試 学生 留学生 卒業生

(任期) 平成18年4月1日～平成19年3月31日

理事(副学長)

濱田 純一

(担当) 総務 リスク・マネジメント 広報  
情報公開・個人情報 監査

(任期) 平成17年4月1日～平成19年3月31日

理事(副学長)

佐藤 慎一

(担当) 国際 渉外・基金 評価  
バリアフリー 総合図書館

(任期) 平成18年4月1日～平成19年3月31日

理事(副学長)

岡村 定矩

(担当) 研究 総長室総括委員会 情報システム 環境安全

(任期) 平成18年4月1日～平成19年3月31日

理事

山田 興一

(担当) 産学連携 調達 企画推進

(任期) 平成18年4月1日～平成19年3月31日

理事

上杉 道世

(担当) 人事労務 事務組織 業務改善 法務・倫理  
男女共同参画

(任期) 平成18年4月1日～平成19年3月31日

監事

石黒 光

(任期) 平成18年4月1日～平成20年3月31日

監事

漆館 日出明

(任期) 平成18年4月1日～平成20年3月31日

副理事

石堂 正信

(担当) 調達 財務企画

(任期) 平成18年4月1日～平成19年3月31日

副理事

竹原 敬二

(担当) 渉外 広報 コミュニケーションセンター  
キャリアサポート

(任期) 平成18年4月1日～平成19年3月31日

副理事(非常勤)

藤井 博英

(担当) 渉外

(任期) 平成18年4月1日～平成19年3月31日

副理事

弦本 英一

(担当) 部局・本部間の連携

(任期) 平成18年4月1日～平成19年3月31日

## 新役員の紹介

平成18年4月1日付けで就任された役員を、以下のとおり、ご紹介します。



理事(副学長)  
佐藤 慎一

昭和44年6月 法学部卒業  
平成5年4月 教授(文学部)  
平成13年4月～平成15年3月  
大学院人文社会系研究科長・文学部長  
所属：東アジア思想文化  
専門分野：中国近代思想  
研究内容(代表的な著書や論文等)：  
『近代中国の知識人と文明』(東京大学出版会)



監事  
漆館 日出明

昭和48年4月 会計検査院  
昭和58年12月 同事務総長官房上席審議室調査官付副長  
昭和60年12月 同第5局郵政検査課総括副長  
昭和62年12月 同第2局防衛検査第1課総括副長  
昭和64年1月 同上席調査官(科学技術担当)  
平成4年7月 日本鉄道建設公団監査室長  
平成6年7月 会計検査院第3局建設検査第3課長  
平成8年4月 同第5局電気通信検査課長  
平成9年4月 同鉄道検査課長  
平成12年12月 同事務総長官房審議官(第4局担当)  
平成16年4月 独立行政法人国立高等専門学校機構監事



理事(副学長)  
岡村 定矩

昭和45年3月 理学部卒業  
昭和51年3月 大学院理学系研究科単位取得退学  
平成3年4月 教授(理学部)  
所属：天文学専攻  
専門分野：天文学  
研究内容：宇宙初期の銀河と大規模構造、  
銀河・銀河団の構造と進化、天体画像処理システム



副理事  
弦本 英一

昭和62年4月 文部省  
平成15年7月 東京大学企画調整役  
平成17年4月 兼総長秘書室長  
平成18年4月 副理事兼工学系・情報理工学系等事務部長

## 役員就任の挨拶

このたび就任された理事(副学長)及び副理事の、就任に当たっての挨拶を以下のとおり、掲載します。

### 現場第一で

理事(副学長) 佐藤 慎一

定年退職を3年後に控えて「老兵は消え去るのみ」と思っていたところ、にわかに最前線に駆り出されることとなりました。最後のご奉公と考へ、微力を尽くすつもりです。

東京大学は多様な任務と膨大な組織を抱える大学ですが、優れた教育と研究を行うことこそが最も根幹的な任務であること、そして教育と研究を現場で担うのが個々の教職員であるということは、大学の設置形態がどのように変化しようとも、決して変わることはない大学の真実でありましょう。東京大学の教育と研究をより優れたものにするには、全ての教職員に課せられた課題ですが、重要な問題でありながら個々の教職員の熱意と努力だけでは解決できない問題が多々存在することも事実であり、そうした問題の解決を組織的にサポートすることが、総長室の最も重要な課題であると考えています。

理事としての私の担当は、「国際」、「渉外」、「評価」、「バリアフリー」など多岐にわたります。いずれも引継ぎを受けて勉強中のことばかりですから、現時点で具体的な抱負を述べることは不可能ですが、「国際」や「評価」は東京大学の教育と研究の成果を外部に向けて正確に発信することが課題であり、「渉外」は東京大学の教育と研究を支えるための支援を外部から獲得することが課題であり、「バリアフリー」はハンディキャップを持つ人たちが可能な限り平等な条件で東京大学の教育と研究に参加できるようにすることが課題であって、いずれも教育と研究の現場と深いつながりを有します。現場を担う教職員をサポートすることを通じて、東京大学の教育と研究をよりよいものにするに少しでも貢献できれば幸いです。

理事として最も警戒すべきは、教育と研究の現場から遊離してしまうことだと思います。私に対する苦情も含めて、率直な意見をお寄せください。このようにすれば東大の教育や研究がさらによくなるというアイデアは、特に大歓迎です。理事の生活はひどく多忙なようですが、せめて昼休みだけでもこれまでの生活習慣を守り、生協食堂で昼食を食べるつもりです。顔を見かけたら、気軽に声をかけてください。

### 就任にあたって

理事(副学長) 岡村 定矩

副学長・理事として研究と情報システムを担当することになりました。

研究はいうまでもなく大学の要です。しかし、大学において研究がどのような形で行われているのか、またそもそも研究とは何かということが、社会や政府にほとんど知られていないように見えます。研究費の交付を受けたとたん研究がスタートし、申請した研究期間の終了時には当初予定した成果があがってその研究が終了する。研究とはそうしたものだという認識の下に評価や資金配分の仕組みが次々と作られています。あらかじめ掲げた目標が予定通りに達成されるような研究は少なくともレベルの高い研究ではありません。東京大学は多くの分野で世界をリードする研究成果を挙げています。真の研究とは何かという理解を広め、東京大学の研究活動を一層発展させるために力を尽くしたいと思います。そのためには、東京大学で行うにふさわしい研究は何かを、国、大学、民間と分けた場合の大学という視点、さらに、多くの大学の中での東京大学という視点から見ることも重要と考えています。

大学の研究は、もう一つの重要な要である教育と結びつくところに本質的な存在意義があります。人類は今や地球という天然の惑星の環境にまで影響を与えるようになりました。悠久の生存を続けようとするれば、人類は将来必ず、予想だにできなかった事態に直面します。不測の事態に対処できる知恵、すなわち人材、を継続的に生み出してゆく源が大学であり、東京大学はその先頭に立ち続けなければなりません。

情報システム関連では、大学としての情報管理体制の確立、情報を活用した事務作業の効率化や学生・教職員さらには社会へのサービスの向上など、取り組むべき事柄が山積しています。理想の情報システムとは何かと議論すれば百家争鳴となるのが常です。最も直接的に影響の及ぶ現場の意見や経験を踏まえた上で、優先度に応じて一つ一つの課題を解決してゆきたいと思います。

### 部局・本部間の連携担当

副理事 弦本 英一

このたび、副理事兼工学系・情報理工学系等事務部長を拝命いたしました。前職の企画調整役は本部事務の部長抜いで総長秘書室長を兼ねていました。今まで本部にいましたから、現場から遠いところにいました。本部では、各部長・課長を部局からの疑問をワンストップで受け付ける「部局パートナー」として活用し、現場のことをよくわかるようにしてきました。今回はさらに進んで、総長の肝煎りで、本部の事務職員の約3分の1に当たる100人を2006年度内に部局へ異動することを計画しています。本部では係長の6人に1人、主任の5人に1人、係員では半分強は部局での勤務経験がありません。勤務経験のある人も法人化前の経験が多いので、今回、現場を知ってもらい、あるいは逆に本部を知ってもらいというのはとても良いことです。本部も部局も互いのことを思って行動することが、これまで以上にできることが両者の連携にとって重要だと思います。

これからは、部局と本部との連携という視点から任に当たることとなります。ヒト、モノ、カネ、情報、運営いろいろな面で部局と本部の関係は出てきます。大学の運営は、研究、教育、医療等の活動が円滑に行われるようにすることが目的です。本学の教員や学生の皆さまは優秀ですので、皆さま方が研究や勉学に勤しむ時間をより確保するために、今まで行ってきた業務改善の活動も続けながら、尽力いたしたいと思います。

## 役員退任の挨拶

このたび退任された理事(副学長)の、退任に当たっての挨拶を以下のとおり、掲載します。

### 退任のご挨拶

前理事(副学長) 桐野 豊

平成17年度に研究、国際交流、及び環境安全を担当いたしました。それぞれの分野で強く印象に残っている点を振り返ってみたいと思います。研究面では、多数の部局にわたる研究者が連携・協力して活動できる体制作りが進展したことが大きいと思います。総長室総括委員会のもとに生命科学の教育及び研究のネットワークがつくられたことは、ほとんど全部局に分散している生命科学研究者が互いに知り合い、情報交換を容易に行い、生命科学の教育の向上を図ることができるだけでなく、今後、東京大学の生命科学の構造化がなされて、学外から東京大学の生命科学の全体像が見えやすくなるものと思います。また、サステイナビリティ学連携研究機構、地球観測データ統融合連携研究機構は、社会のニーズに応える取り組みを全学的に行う組織ということで、大型競争資金の導入にも成功しています。総長室総括プロジェクト機構に設置された寄付研究部門についても同様のことが言えましょう。

国際交流面では、国際連携本部、研究協力部国際課、国際交流委員会、北京代表所等の組織間連携と関係者のチームワーク及び小宮山総長の外交活動により、東京大学の国際的プレゼンスは格段に増大したと思います。

環境安全面では、リサーチフェローの山下高広氏の潜水作業中の死亡(7月4日)という痛恨事がありました。この事故の原因究明と再発防止策の制定を軸として、環境安全本部では、東京大学の環境・安全・衛生に関する諸規則や対策が精力的に整備致しました。防火防災マニュアルの策定や、高圧ガス貯蔵問題等、新年度に持ち越しになった重要課題もありますが、東京大学は環境安全面でもトップレベルの大学になりつつあると思います。

これらの活動の中で、総長室と部局との間にある程度の緊張関係が現れることがありましたが、それは適度の緊張関係であり、東京大学の組織の健全さを改めて認識いたしました。

終わりに、私事に亘りますが、私は、理事・副学長退任と同時に、定年により東京大学教授を退職しました。長い間お世話になりました東京大学に深く感謝申し上げますと共に、東京大学が世界の知の頂点に向かって、益々発展することを祈念致しまして、お別れのご挨拶とさせていただきます。どうもありがとうございました。

### 退任のご挨拶

前理事(副学長) 石川 正俊

平成13年度の広報委員長、平成14、15年度の総長特任補佐、平成16年度の副学長、平成17年度の理事・副学長と立場は変わりましたが、5年の間、大学本部の仕事を務めさせていただきました。この間、法人化をはさみ、東京大学の大きな変革の時期を大過なく乗り越えられたことは、多くの方々のご支援の賜物と心より御礼申し上げます。

この間、大学を取り巻く環境や社会が望む大学のあるべき姿は大きく変わってきたように思います。もちろん、我々大学人が望む大学のあるべき姿もまた大きく変わってきたように思います。大局的に見て、社会の中での大学というもの強く意識するようになったと思いますが、揺れ動く社会の中で、大学の基本的なスタンスを大学自身が見失うことがないよう、我々大学人の高い見識と高邁な理想をもって、社会から信頼される東京大学を維持し発展させる必要があると思います。社会の価値構造を大学が無防備に受け入れるのではなく、むしろ大学は積極的かつ能動的に社会に問いかける必要があり、その視点において、大学の真価が問われる時代になったように思います。

私が主として携わって参りました産学連携は、5年前には全学的な基盤が全くなく、一から立ち上げる必要があったため、意見集約、学内合意の形成、ポリシーの設定、整備計画の策定等に始まり、具体的な組織の設計、制度の設計、規則の制定等を経て、共同研究の推進、知的財産の管理と運用、事業化の推進と様々な形で精力的に展開し、現在のようアクティビティが実現されるに至っております。科学技術の基本構造の変化に伴い、研究活動の多様化、知的財産戦略の国際化、事業化スキームの複雑化等、研究者にとって研究成果を世に問う仕組みが様々な様相を呈するようになり、大学の共通基盤としてそれらに対応できる体制を整えることを目標に活動して参りました。

これらの活動を通して感じることは、大学の教職員の方の東京大学の未来への熱い思いで、とりわけ職員の方々には、新しい仕組みを築き上げることへの強い意欲と頼もしい行動力のもとに、先頭に立って新規事業の推進にご尽力頂きました。ここに心より感謝申し上げますとともに、今後のご発展を祈念致しております。

平成17年度卒業式が、3月24日（金）に、大講堂（安田講堂）において挙行された。

式は、第一部（9時開式）文系・教養学部、第二部（11時開式）理学部等の2回に分けて行われ、約3,050名の卒業生（卒業生数3,298名）が出席した。

開式に先立ち、総長をはじめ、理事・副学長、各学部の学部長及び代表教員、並びにご来賓（経営協議会学外委員、学友会役員、各学部の同窓会等代表者）の方々がアカデミック・ガウンを着用のうえ登壇し、開式となった。

はじめに、音楽部管弦楽団による、バッハ「管弦楽組曲第一番」が演奏され、壇上列席者の紹介があった後、第一部は古田理事・副学長から、第二部は桐野理事・副学長から学事報告が行われ、小宮山総長から、各学部卒業生代表に、順次、学位記が授与された。

続いて、小宮山総長から卒業生に告辞が述べられた後、音楽部コーラルアカデミーによる東京大学の歌「大空と」の合唱、出席者全員による同じく東京大学の歌である「ただ一つ」の斉唱をもって式を終了した。

なお、卒業生の父母会場（法文2号館31番教室、3番大教室及び1番大教室）にはモニターを設置のうえ大講堂での式典の様相を放映し、父母など約2,750名が出席した。また、2回の式ともインターネットによるライブ中継を行った。

## 平成17年度東京大学卒業式総長告辞



東京大学総長  
小宮山 宏

本日ここに卒業を迎えられた皆さんに、東京大学の教職員を代表して心からお祝いを申し上げます。皆さんは、本学の学部教育課程を修了し、めでたく卒業証書を手に入れました。

もちろん、それは、ただ学業を修めたというだけではなく、学生生活を通じて多くの友人を得たり、尊敬すべき人に出会ったり、さらには、大学生として社会と関わるなど、様々な学びの経験を積まれたということをも意味しています。みずからの責任において大学生としての自由を享受しつつ、四年間の学業生活を経て、いま、ここに、卒業という人生の重要な区切りを迎えられたことに対して、心からのお祝いを申し上げたいと思います。また、同時に、皆さんを、遠くから、近くから、ここまで支えてこられたご両親をはじめとする御関連の皆様にも、心からの敬意とお祝いを申し上げます。

さて、四年間を過ごした東京大学とは、皆さんにとって果たしてどのような処だったのでしょうか。そこで皆さんが身に付けたものはいったい何だったのでしょうか。

その答えは皆さんそれぞれ異なっているでしょう。一人ひとりにいろいろな考えや思いがあるでしょう。

しかし、今日、皆さんを社会に送り出す者として、私は、ここで、東京大学が、そして社会が、皆さんに何を期待しているのかという、皆さんへの思いをお話したいと思います。

東京大学は、その教育の目標として「広い視野を有するとともに高度の専門的知識と理解力、洞察力、実践力、想像力を兼ね備え、かつ、国際性と開拓者的精神をもった、各分野の指導的人格を養成する」ことを掲げています。そして、その目標に向かって、「幅広いリベラル・アーツ教育を基礎とし、多様な専門教育と有機的に結合する柔軟な学部教育システム」を実現することを宣言しています。このことは、平成十五年三月に制定された「東京大学憲章」に謳われています。

つまり、「専門知」とも言うべき、それぞれの専門分野にお



ける深い知識と学力を持ちながら、その専門性にとらわれることなく物事を多角的に観ることのできる幅広い教養、すなわち「総合知」を身に付けているということが、東京大学が皆さんに期待していることなのです。皆さんは二年間の教養課程とそれに続く専門課程から成る学部教育システムを通して学んだことによって、さらには、きわめて多くの専門分野を擁する総合大学である東京大学で学んだことによって、自ずとそのような力を身に付けているはずなのです。

数年前、本学の卒業生に関する企業アンケート調査を行ったことがあります。その結果によると、多くの企業が「東京大学の卒業生は総合的な判断力と幅広い知識をもっている」、また「自ら努力して伸びる人材が多い」と評価していただきました。これは、東京大学の教育目標に照らして好ましい評価です。その一方で、「社会的な責任感」、「地球的・国際的な視野」という点に関しては、まだ十分とは言えないという評価もいただいています。しかし、私は必ずしもこの結果を悲観的に捉えてはおりません。むしろ東京大学の卒業生の皆さんがよりいっそうの「社会的な責任感」や「地球的・国際的な視野」をもつことを、現在の社会全体がより強く期待し、求めていることの表れととらえるべきだと考えているのです。

ですから、私としては、そうした社会からの要請に皆さんが充分に応える意志をもっていたいただきたいと願うのです。実際、皆さんはこの四月から様々な進路を歩まれることとなりますが、どのような進路を進むにしても、このわれわれの社会が、現在、多くの課題を抱えていることを忘れないでいただきたい。環境問題・エネルギー問題・少子化問題・高齢化問題・巨大都市に伴う問題など、現代社会の問題は、文字通り枚挙に暇がありません。そのどれもが空前のスケールで展開する決定的に重要な問題であり、しかも日本だけに固有なものではなく、人類社会の全体に関わる問題なのです。日本は、狭い国土にもかかわらず、高度に産業化した経済を擁するがゆえに、それらの問題が世界の多くの国に先駆けて集中的に顕在化しています。ですから、日本の今日の現実、二十一世紀のそう遠くない時期において、世界中の人びとの現実となる可能性が大なのです。

私は、二十一世紀に地球社会が遭遇するであろうこれら未曾有の困難に対して、日本はみずからの課題を解決することを通じて人類社会のビジョンを先取りして示すべきであり、また、示すことができると考えています。それは、人類共同体における私達の使命なのです。逆に言えば、今、日本社会に降りかかっている困難は、私達が真に国際社会の一員として世界に貢献するフロントランナーとなるチャンスを与えてくれているということでもあります。そして最も大切なことは、私達はそれ

らを解決する能力をもっているということです。そのことに、私達は自信をもってよいのです。

ここで具体的内容を、私の専門分野に近いエネルギー問題を事例としてお話ししましょう。

人類はエネルギー源を、石油・石炭・天然ガスなど化石資源に依存しています。日本はその多くを輸入に頼っており、現在、エネルギー資源の海外依存率は八〇パーセントにも達します。このこと自体は、日本にとって苦しい厳しい状況であることは間違いありません。しかし、歴史的に考えてみると、それがかならずしも不利に働いたとばかりは言えません。輸入に頼らざるをえないエネルギーの価格が高かったがゆえに、日本は世界一と言ってよいくらいエネルギー効率の高い国に成長したのです。国民総生産の高さに対して、エネルギー消費は、主要国のなかで最小です。世界の十二パーセントの財を生産しながら、エネルギー消費を反映する二酸化炭素の発生量は五パーセントにも達しません。また、産業のエネルギー効率も、製品のエネルギー効率も、多くが世界最高ランクに位置しています。ご存じのように昨年来、石油の価格が暴騰しましたが、その高騰に対して日本社会は強い抵抗力を示しました。エネルギー効率は、再生可能エネルギーと並んで、二十一世紀のエネルギー政策の基本ですが、その点においても日本はすでに世界のトップランナーなのです。この事例は、エネルギー資源に乏しいという不利な状況が、むしろ世界全体が向かうべき社会モデルを世界に先駆けて実現させる誘因となったことを示しています。

このように、日本は、天然資源に恵まれなかったために、エネルギー効率の良い国を造り上げることができました。同様に、人口密度の高い先進国であるからこそ、みずから環境規制を強めることによって、いまでは美しい空や海を取り戻しつつあるのです。資源に乏しい人口密度の高い先進国という日本の現状が、来るべき地球の姿であることは容易に想像できましょう。私達は、自らの課題を解決することに成功すれば、それが人類全体の社会モデルとなることで国際社会に貢献できるという可能性を賦与されているのです。

振り返ってみれば、明治維新以降、日本は欧米諸国からさまざまな産業や社会制度を導入して先進国となりました。そして、今や世界に類を見ない「課題先進国」となったのです。しかし、いま、私達の社会が抱えている課題は、もはや、再び欧米諸国から何かを導入することによっては解決できないのです。むしろ私達こそが世界に先駆けて課題を解決しなければならないのです。私が日本を「課題先進国」と定義する意味はここにあります。エネルギー問題も、そしてこの他の多くの問題も、まずは、日本において課題が顕在化しているのです。「必要は発明

の母」という、よく知られた言葉を引用するまでもなく、私達自身が二十一世紀の社会モデルを作り上げなければならないのです。そして、そうすれば、みずからの社会の解決モデルが、やがて襲う未曾有の困難から人類を救うのに役に立つのだと私は主張しているのです。

私達は、みずから問題を設定し、分析し、解決の可能性を求め、国際社会の合意を得て、実行するという、フロントランナーとしての振る舞いをしなければなりません。「課題先進国」であるという現状を明確に意識し、「課題解決先進国」を目指す——それが日本のビジョンであり、その世界史的な役割なのではないでしょうか。そのことを通じて、地球社会持続のモデルを実現し、国際社会の一員として人類に貢献しなければならないのです。

もちろん、このグローバル化の時代にあって、これらの課題解決や社会モデルの実現は、一国のみで成すべき事ではなく、また成し得る事でもないでしょう。私達が「課題解決先進国」というフロントランナーとしての独自性を保ちつつ、問題意識を国際社会と共有し、地球規模の社会モデルを提案していくためには、国という意識を越えて、政治的にも科学技術的にも、国際的なネットワークを構築する努力が必要です。さらに、そのような努力は、文科・理科という学術の枠をも越えて為されるべきなのです。

今日、東京大学を巣立ち名実ともに社会のなかに入っていくとされている皆さん、私は、皆さんが、それぞれの立場からこの「課題解決先進国」への厳しい、しかし真に充実した道のりに参加されることを心より願っています。皆さんの東京大学での学びこそが、この「課題解決先進国」の実現に寄与するものであることを確信しているのです。

課題の解決は、それが重大であればあるほど、個人の力だけでは成し遂げられません。かならずや、そこにはさまざまな異質な人びとの相互協力や連携が必要になってきます。その意味では、卒業はけっして皆さんとお別れを意味しません。むしろ、社会のなかでの皆さんのそれぞれの現場と東京大学は、これからもさまざまな仕方で結ばれていくべきだと私は思います。総長として、私は、東京大学が、皆さんにとって、今後も、いや、これからこそいっそう、課題解決という共通の目標のために必要な知のネットワークの場として機能しつづけることを約束したいと思います。

昨年夏、私は東京大学総長として「時代の先頭に立つ大学—世界の知の頂点を目指して」と題するアクションプランを発表しました。時代の先頭に立つ大学という標題は、「課題先進国」という状況を背景にしています。昨年の入学式で私は、「本質を捉える知」、「他者を感じる力」、そして「先頭に立

つ勇氣」を持つと、新入生に訴えました。それこそ、二十一世紀冒頭という現時点において、世界が必要とする資質であり、また東京大学が目指すところである、と訴えました。それをここでも繰り返したいと思います。日本は「課題解決先進国」になるべきです。みずからの困難解決のためにだけでなく、それが日本が果たしうる、果たすべき世界史的な役割であるからです。それこそ、国際社会さらに人類共同体の一員としての日本社会の力の源(みなもと)になると私は信じているのです。そのために是非、これからも一層、社会の現場において、「本質を捉える知」、「他者を感じる力」、「先頭に立つ勇氣」を育くみ続けていただきたい、そのように強くお願いして、私の式辞の結びといたします。

(平成十八年(2006年)三月二十四日)



平成17年度学位記授与式が、3月23日（木）に、大講堂（安田講堂）において举行された。

式は、第一部（9時開式）理学系研究科、工学系研究科、農学生命科学研究科、医学系研究科、薬学系研究科、数理科学研究科、情報理工学系研究科、第二部（11時開式）人文社会系研究科、教育学研究科、法学政治学研究科、経済学研究科、総合文化研究科、新領域創成科学研究科、学際情報学府、公共政策学教育部の2回に分けて行われた。

式には、約2,500名の修了生（修了生数4,129名（修士課程2,732名、博士課程1,126名、専門職学位課程271名））が出席した。

開式に先立ち、総長をはじめ、理事・副学長、各研究科長及び各研究所長がアカデミック・ガウンを着用のうえ登壇し、開式となった。

はじめに、音楽部管弦楽団による、バッハ「管弦楽組曲第一番」が演奏され、壇上列席者の紹介があった後、第一部は石川理事・副学長から、第二部は濱田理事・副学長から学事報告が行われ、小宮山総長から各研究科・課程の修了生代表に、順次、学位記が授与された。

続いて、小宮山総長から修了生に告辞が述べられた後、音楽部コーラルアカデミーによる東京大学の歌「大空と」の合唱、出席者全員による同じく東京大学の歌である「ただ一つ」の斉唱をもって式を終了した。

なお、修了生の父母会場（法文2号館31番教室、3番大教室及び1番大教室）には、モニターを設置のうえ大講堂での式典の様相を放映し、父母など約2,400名が出席した。

## 平成17年度学位記授与式総長告辞

東京大学総長  
小宮山 宏

本日、博士、修士あるいは専門職の学位を授与された皆さん、おめでとうございます。東京大学を代表して、心よりお祝い申し上げます。

皆さんは、それぞれ専門分野において、深い研鑽を積み、高い学識を蓄積し、優れた研究成果を挙げられました。長いあいだの地道な努力がここにひとつの達成を見たことで皆さんは、おそらくいま、幸福な達成感を味わっておられると思います。しかし同時に、ここに至る道がけっして平坦ではなかったことを、私自身の経験から推測いたします。研究にはさまざまな困難が伴います。その困難を乗り越えて今日、この晴れの場に至った皆さん、そして皆さんの努力を陰で支えてこられた方々を、総長として、心より賞賛し祝福いたしたいと思います。

今年は、東京大学として初めて、専門職大学院の修了生を世に送り出す、記念すべき年でもあります。それぞれ進まれる道は異なっても、東京大学で身につけられた「課題をいち早く発見し、その解決に主体的にかかわる」という、広い意味での研究マインドは生涯、皆さんとともにあるはずで、そうした皆さんのために、この晴れの場において私の思いを伝えたいと思います。

私が総長の職について一年になりますが、この間、東京大学の大学院生が優れた研究を行い、さらに社会で活躍するのを目の当たりにして、大いに勇気づけられることが、しばしばありました。

一例をあげると、医学系研究科博士課程に在籍する宮本伸哉さ



んは、病院の診療研修の間に、幼い子供が頭部に外傷を負って運ばれてくる事例が多いことに気づきました。調べてみると、母親が幼児を自転車の補助椅子に座らせて走行している時に、あるいは目を離した一瞬の隙に自転車が倒れ、転落した子供が時には致命的な外傷を負うという事実には思い至ります。そこで直ちに、実態調査を行うとともに、自転車の補助椅子に乗る子供たちにヘルメットを着用させるべく社会啓発活動を始めました。行政や報道によってこの活動は広く支持され、今日では、自転車に乗った幼い子供たちが、ヘルメットを着用しているのを見るのは珍しいことではなくなりました。その結果、多くの幼い命が救われることになったわけです。研究を通して、それまで注目されてこなかった重大な課題を認識し、突き詰め、その解決を社会に向かって訴え、先頭に立って努力を惜しまなかった宮本さんの知と勇気に対して、私は平成十七年度の総長賞を授与いたしました。しかし同時に、私は、本日ご出席のすべての皆さんが、宮本さんと同様、課題解決の知と勇気を備えているものと確信しております。

皆さんの仲間ということで、もうひとつお話ししたいことがあります。皆さんは、東京大学に、視覚に障害を持ちながら、化学を専攻することを希望して入学し、化学や物理などの実験を他の学生と同様に行い、初志を貫徹して現在も博士課程で研究を続けている方がおられることをご存じでしょうか。東京大学では、この方以外にも何人も学生が身体の不自由をのりこえながら、学問に打ち込んでいます。

身体の障害は、生得的なものとは限りません。事故や病気の後遺症、あるいは、年齢を重ねることによって誰にでも起きうるのです。身体の障害は、したがって、健常者と連続的に繋がっている普遍的な問題ととらえるべきなのです。

東京大学では、バリアフリー支援室を設置し、障害を持つ学生や教職員の支援をしています。私は東京大学大学院を修了していく皆さんが、基本的な教養として、自らの心身の健康を長く維持していくためのスキルと知識を身につけると同時に、いつまでも他者の痛みや苦しみを感じる力を持ち続け、優しい社会の建設を目指す活動を続けて欲しいと願っております。

私は、昨年四月の学部入学式で、新入生に「他者を感じる力」を備えて欲しいと呼びかけましたが、「他者を感じる力」は、新しい学問分野の創出につながることもあります。実は、東京大学には障害に関わっている研究者が多数、しかも多様な形で存在しています。知覚認知科学や医学など、障害と直接関わる研究分野ではもちろんのこと、経済学、文学、工学など広範な領域で障害の学問、障害学の構築をめざしている研究者がおります。人間を対象とするすべての科学は、潜在的に障害学とともにあると言うことすら可能になるほどに、東京大学には、さまざまな分野で障害と向き合った研究をしている方がいて、総長

としてはその全学的連携を模索したいと考えているところです。

研究というものは、本来優れて個人的な営みであり、それゆえに多様性が確保されるものです。しかし、「他者を感じる力」は、そこに新しい可能性をもたらすことがあります。本日、学位を得て旅立つ皆さんも、それぞれが選んだ道で、個としての志を高く掲げるとともに、「他者を感じる力」を発揮して、よりスケールの大きい研究や実務を開始してくださることを切に願っています。

さて、皆さんにとって、東京大学大学院とはどのような場だったのでしょうか。皆さん自身、おそらく入学して以来、優れたライバルや先輩、才気溢れる後輩たちの存在に、恐れやまぶしさを感じるものがしばしばあったのではないのでしょうか。しかし、実は、皆さん自身が、まばゆい光を放っていることを、どれほど意識しておられるでしょう。

東京大学の高度な学術研究教育、社会連携の活動を支えているのは、こうした輝く人々であり、そのつながりなのです。東京大学が誇るこの「人のつながり」には、現役の教職員や、学生だけではなく、多くの卒業生が含まれていることを忘れてはなりません。皆さんは、現在すでに、そしてこれからも、東京大学が誇るべき人のネットワークの一員なのです。学位の取得、そして修了は、東京大学との絆がこれで終わるということの意味しません。むしろ、学位は、ネットワークの正式登録証であると、そのようにお考えいただきたいと思います。東京大学は、皆さんのこれからの人生にとっていつまでも有意義な存在であり続けたいと思っていますし、また、皆さんの力を人類社会の未来のために今後とも結集し続けたいと思っています。学位記授与式にあたり、私は、皆さんの東京大学との絆がよりいっそう強まることを切望致します。

ただ残念なことに、現在の我が国では、アカデミーを除く一般社会は、博士取得者の受容にいまだに積極的とは言いがたい現状があります。これは、「博士の取得者は狭い研究に固執するばかりで柔軟性がない」というある種の偏見に基づくものだと私は考えています。現代社会は、博士の専門知識とその総合的な判断力を必要とするさまざまな課題に満ちています。私は、社会一般が高度な知がもつ未来を切り開く力を正しく評価し、いま以上に、博士の受容が進むことを強く希望する者ですが、同時に、博士を送り出す責任ある立場の人間として、皆さん方もまた、それぞれの高度な専門性を一般社会の課題に対応するものとして使いこなすことができるようにと、そう願わないわけには参りません。

ここにいる皆さんは、今後は社会のなかで、あるいは大学等の研究機関において、新たな課題に取り組むことになります。

研究の課題は、通常、優れた頭脳や豊かな感性から生み出さ

れ、知的好奇心に支えられ、自由な発想のもとに設定されるものです。自ら作り出す課題と言っても良いこうした課題設定のあり方は、しばしば「学問の本質は自由である」と表現されるように、大学人にとって最も大切な自由な研究活動の根幹にあるものです。とはいえ、この自由は、何をするのも勝手というような責任の感覚を欠いた、幼稚な自己満足的な意味の自由ではありません。そうではなく、真理のために、いかなる定説をも疑ってみようような自由な発想の力なのです。人間の活動領域と知的体系を、過去にとらわれずに、より豊かにしていく自由のことです。大学は人類社会から、自由を行使し、その成果や波及効果を社会に還元することを負託されています。この自由には、当然のことですが、基本的な責任が伴います。大学、あるいは一人一人の研究者が、この責任に無自覚な行動をとることは、学問の存立自体を脅かすこととなります。

さて重要な課題の選択として、社会科学であれ自然科学であれ、あるいは政策決定等の現場であれ、人類社会が今直面している切迫した問題群から否応なく課せられる課題設定があります。将来のための課題を発見し、その解決に道筋をつける努力を始める、ということです。宇宙のなかでも奇跡的に美しい地球という星の住人であるわれわれ人類は、国という単位をつくり、それぞれ異なる文化や価値観を持ち、異なる速さでそれぞれの個性ある発展の道をたどりながら、暮らしています。しかし、その生活は必ずしも安全とは言えず、富や教育、疾病等において地域間格差は増大する一方であり、地球規模での環境汚染や破壊、文明論的衝突、宗教的対立等が脅威となって降りかかってきています。もちろん、我々はこのまま手をこまねいて傍観しているわけにはいきません。人類の生存に対する危機意識を感じないではいられないのです。ここにいる皆さんは、広い意味での知の活動を通して、これらの課題に主体的に関わっていくことが期待されているのです。

こうした歴史的な、人類的な課題の解決にも、それぞれの現場での、過去にとらわれない自由な発想が不可欠です。私は、皆さんが、学問の自由の精神、歴史に対する鋭い感性、さらに研究の自由を人びとのために役立てるという深い倫理性をもって、今後の活動を進めていただきたいと思います。

ところで、皆さんは、日本で学位を取得したわけですが、その文明論的意味を考えたことがおありでしょうか？私は、ここで日本は現在、世界史的な意味で「課題先進国」であるということをおし上げたいと思います。一例として環境問題を取り上げてみましょう。一九六〇年代から七〇年代にかけて日本の海や川や空は、ひどく汚染されました。日本のような狭い国土で世界第二という巨大な生産を行えば、よほど注意しなければ環境が汚染されるわけです。四日市ぜんそく、水俣病といった、痛ましい公害も経験しました。

私達は、汚染物質の環境への排出を極度に制限せざるを得ませんでした。例えば、火力発電を行うと燃料中に含まれる硫黄の酸化物が発生し酸性の雨を降らせません。現在、発電量あたりで比較して、日本の火力発電からの硫黄酸化物排出量は、主要国のなかで最小です。それも、米国や英国の二〇分の一、ドイツの五分の一といったように、群を抜いた少なさです。厳しい環境規制とそれに応えた社会の努力とによって、日本の環境は著しく改善され、世界に誇り得る状況になっております。

日本は、天然資源に恵まれなかったから、エネルギー効率の良い国を作り上げたのであり、人口密度の高い先進国であるから、環境規制を強めて美しい空や海を取り戻しつつあるのです。資源に乏しい人口密度の高い先進国という日本の現状が、来るべき地球の姿であることは容易に理解されるでしょう。日本が、自らの課題を解決することに成功すれば、それは人類全体の社会モデルとなる、そういう可能性を賦与されているのです。

今、私たちは、こうした課題を解決するために、導入すべきモデルを欧米に見いだすことができるのでしょうか。そうではないのです。私が日本を課題先進国と定義する意味はここにあります。環境問題もエネルギー問題も、世界に先駆けて、日本において課題が顕在化しているのです。

地球規模で見た文明は、階層構造をなしていたり、入れ子状態になっていたり、複雑な様相を呈しています。日本が直面している問題、日本がこれから直面するであろう諸問題は、やがて地球規模で全体を覆うであろうし、その課題への対処は、独り日本だけに留まらず、人類の生存にまで影響を与える可能性を持っています。

逆にいえば、私たち日本人には、世界から暗黙のうちに託されて先取りして研究すべき重要な課題があるであろうということです。私は、このような立場にある日本を、課題先進国と呼んでいます。私たち東京大学は、人類社会が健康な持続的発展、いわゆるグローバル サステナビリティ、を達成するための理念や方法論を追求するため、人文科学・社会科学・自然科学・工学などの東京大学の総合知を結集して新しい研究組織を作り、大きなうねりを引き起こそうとしています。

皆さんにおかれましても、課題先進国日本の東京大学で学んだことに確信をもち、それぞれの場で、個人的なレベルでの自由な学術的問題意識に基づく課題設定とともに、地球規模での問題意識を常に念頭におき、オリジナリティの高い課題設定と、その解決の探求の、最前線を担っていただきたいと思います。

皆さんのたゆまぬ努力がもたらすであろう達成の喜びを、社会とともに分かち合えることが今後とも続くことを期待して、私の式辞の結びといたします。

平成十八年（2006年）三月二十三日



平成17年度第2回 学生表彰「東京大学総長賞」の授与式が、3月23日（木）17:00より、小柴ホール（本郷キャンパス）にて開催された。

学生表彰「東京大学総長賞」は、本学学生を対象として、学業、課外活動、各種社会活動、大学間の国際交流等の各分野において、「他の学生の範となった」「優れた評価を受けた」「優秀な成績を修めた」などの顕著な功績があった個人又は団体に総長が表彰を行うものであり、平成14年度から設けられている。

今年度第2回の「東京大学総長賞」には、個人23件、団体20件の合計43件の推薦があり、学生表彰選考委員会の慎重な審議の結果、下記のとおり、個人8件、団体2件の計10件が選考された。

表彰状と記念品を受け取るペテル・マトウシュ相撲部主将

授与式には受賞者及び関係者の他、多くの学部卒業生・大学院修了生代表も参加し、選考結果の報告、総長の挨拶のほか、各受賞者から今回の受賞に関するプレゼンテーションが行われた。

さらに授与式後の懇談会においては、参加者同士がお互いの学業成果等を讃えあう場となった。



## 受賞者紹介

### 個人の部



#### 山口真由（法学部4年）

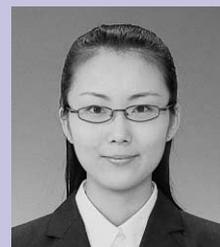
山口氏は、平均点97.6点で教養学部前期課程の全コースで優を取得し、法学部においても全コースにおいて優を取得して「卓越」として表彰される。また3年次に司法試験に合格、4年次に国家公務員試験にも合格。課外活動においては東京大学運動会男子ラクロス部のマネージャーとして1部リーグ優勝を果たした。また、スキースキの才能を生かし、スキースキのパトロールのボランティア活動に参加している。

現在、演習担当教員との共著として研究書を刊行するための努力を重ねており、同氏は卓越した知的能力と奉仕精神を兼ね備えたすばらしい人物であるとの評価を得ている。

#### 関 麻衣（公共政策学教育部修士課程2年）

公共政策学教育部では、学生の成績評価は、A+、A、B、C、Fの5段階とし、特別の理由がある場合には、合格・不合格の2段階としている。また、授業担当教員が学生の成績評価をするにあたっては一定の制限があり、A+は総数の概ね5%、AはA+含めて概ね30%を上限の目安としている。

同氏は、履修した科目の全てがA以上の評価を得るということが極めて困難な状況下で、総取得単位数50単位（修了要件は46単位）のうち、A+が25単位、Aが23単位、合格が2単位という優秀な学業成績を修めた。



#### 村上祐亮（法学政治学研究科法曹養成専攻3年）

村上氏は、法学政治学研究科法曹養成専攻（法科大学院）の第一期生として卓越した学業成績を修めたばかりでなく、2年次において執筆したリサーチペーパーは極めて高い評価を受け、優秀リサーチペーパー賞を受賞した。また、法曹養成専攻が研究結果公表の場として刊行する電子ジャーナル「法科大学院ロー・レビュー」の発刊を他の有志学生とともに提案し、編集委員会（学生及び教員で組織）の学生側編集委員代表として、同誌の編集・刊行に多大の貢献を果たした。

#### 金井恒人（理学系研究科博士課程3年）

「配列分子中における高次高調波発生の実験的・理論的研究」に関し、配列分子中からの高次高調波発生の物理過程の解明に大きく貢献した。実験的には、配列した二酸化炭素分子を試料とし、高調波とイオンを同一条件下で観測する独自の実験手法の導入により、高調波発生の再結合過程において電子の波の量子干渉効果（強く打ち消しあう効果）が生じることを示す結果を得ることに初めて成功した。さらに、高調波発生の楕円率依存性が分子軸と楕円偏光の長軸の配置によって異なることや楕円率依存性にも量子干渉効果が現れることを初めて観測した。理論的には、原子に対して提案されていたモデルと分子軌道法を組み合わせた新たなモデルを構築し、実験結果を説明することにも成功している。



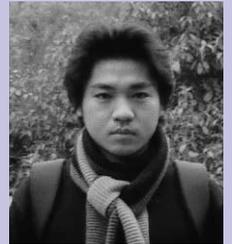


### Petr Matous(ペテル マトウシュ) (工学系研究科博士課程2年)

運動会相撲部の主将としてチームを牽引し、これまでに2004年度東日本学生相撲個人体重選手権大会75キロ未満級第3位入賞、2005年度全国国公立大学対抗相撲大会個人戦(体重無差別)準優勝、東日本学生相撲リーグ戦敢闘賞受賞(団体戦全勝)などの実績がある。この活躍は母国チェコ相撲連盟の知るところとなり、2005年10月16日に大阪府堺市で開催された第13回世界相撲選手権大会にはチェコ代表として個人戦(軽量級)・団体戦(3人制)に出場。特に団体戦では先鋒として奮闘し、主軸1人を怪我で欠いたチームを3位決定戦進出に導く活躍をみせた。

### 小山隆太(薬学系研究科博士課程3年)

小山氏は、慢性脳疾患である側頭葉てんかんの原因の一つである海馬神経細胞の形態異常に着目し、ラット由来の培養海馬切片にてんかん状態を誘起する優れた方法を発案することでその解析にあたった。そして、蛋白質である「脳由来神経栄養因子」の関与を世界で初めて明確にし、同分子の阻害により神経細胞の異常形態形成および海馬におけるてんかん状態を阻止できることを示した。この結果は、権威のあるJournal of Neuroscienceに掲載された。また、計8報の国際論文を発表し、そのうち2報の総説ではてんかんの新規治療法に関する仮説を提示し、同分野の研究に基礎医学の立場から新たな風を吹き込んだ。



### 李書敏(リシュミン)(数理科学研究科博士課程3年)



世界で初めて有限回の観測によって異方性媒質を決定する逆問題の数学解析に成功した(李書敏: SIAM J. Math. Anal. 37 (2005), pp. 1027-1043)。また「Estimation of coefficients in a hyperbolic equation with impulsive inputs」において、波動方程式の係数を単独回の観測で決定する逆問題の安定性を初期条件が零の場合に証明した。このような設定は地震学のモデルなどと関連して現実的であるが、従来の理論面の成果は、既知の係数に対して未知係数が十分小さい場合に限定されていたが、同氏はそのような条件を外すことに成功した。本論文は、V.G. Romanov 教授らによるロシア学派の成果を大きく一般化したものであり、J. Inverse and Ill-Posed Problems にまもなく出版される。

### 須磨航介(総合文化研究科博士課程3年)

須磨氏は、博士課程の3年間で大気化学に関わる反応中間体分子を数多く検出し、それらの結果を9報の原著論文として発表した。なかでも特筆すべきは、酸素原子が3個鎖状に連なった分子構造を持つラジカル種HO3と分子HOOOHを初めて気相中で検出し、その構造を確定したことである。前者は、大気化学で重要なOHラジカルと酸素分子との会合体と見なすことができ、大気中のOHラジカルの振る舞いに大きな影響を与える系として注目されている。また、後者は古く19世紀末より存在が仮定されていた分子であるが、初めて気相での存在を確定した。さらに、やはり大気化学で重要なHOOラジカルと水分子との錯体も初めて検出し、その構造を明らかにした。



## 団体の部

### 東京大学運動会ラクロス部男子



運動会ラクロス部男子は、平成17年度関東学生ラクロスリーグ戦では、前年まで7連覇中であった慶應大学を破り、実に15年ぶりとなる関東制覇を達成した。12月に行われた全日本選手権においても、北海道大学に続いて再度慶應大学を破って史上初となる決勝進出を果たし、社会人チームと互角に渡り合った結果、準優勝の成績を収めた。

選手の海外派遣や外国人コーチの招聘など海外との交流、データ解析、メンタルトレーニングなどを駆使した先進的な組織力は他大学の模範ともなっており、日本におけるラクロス競技レベルの向上にも大きく寄与している。

### 東京大学英語ディベート部

本年1月にアイルランドにて開催された28カ国、参加者約1000名の英語ディベート世界大会(World University Debating Championship)のESL(English as a Second Language)部門において、日本人チームとして初の準決勝進出を果たした。これは過去10年に英語ディベート国際大会において予選を通過できなかった日本人チームとしての快挙である。また、昨年開催されたオーストラリアアジア大会、北東アジア大会にてもESL部門準決勝、決勝進出という日本代表としての新記録を作り、英語ディベート界において本学の名声を広げた。



# NEWS



平成18年4月1日付で、下記のとおり部局長の交代がありました。新部局長をご紹介しますとともに、退任された部局長のご挨拶を掲載します。

	新部局長	前部局長
大学院工学系研究科 ・工学部	松本 洋一郎	平尾 公彦
大学院教育学研究科 ・教育学部	金子 元久	佐藤 学
大学院薬学系研究科 ・薬学部	柴崎 正勝	海老塚 豊
大学院数理科学研究科	桂 利行	(再 任)
大学院情報理工学系 研究科	武市 正人	(再 任)
大学院情報学環 ・学際情報学府	吉見 俊哉	花田 達朗
大学院公共政策学連携 研究部・教育部	森田 朗	(再 任)
東洋文化研究所	関本 照夫	田中 明彦
生産技術研究所	前田 正史	(再 任)
宇宙線研究所	鈴木 洋一郎	(再 任)
物性研究所	上田 和夫	(再 任)

## 新部局長紹介

### 大学院工学系研究科・工学部

松本 洋一郎 教授

(任期：平成18年4月1日～平成20年3月31日)

1972年4月 工学部卒業

1977年3月 大学院工学系研究科博士課程修了

1992年8月 教授(工学部)

所属：機械エネルギー工学講座

専門分野：流体工学

研究内容(代表的な著書や論文等)：

Yoichiro Matsumoto, John S. Allen, Shin Yoshizawa, Teiichiro Ikeda, Yukio Kaneko, Medical ultrasound with microbubbles, Experimental Thermal and Fluid Science 29, pp255-265, 200501

Taisuke Sugii, Shu Takagi and Yoichiro Matsumoto, A molecular-dynamics study of lipid bilayers: Effects of the hydrocarbon chain length on permeability, the Journal of Chemical Physics, Vol.123, No.18, pp184714, 200511

熱流体ハンドブッカー現象と支配方程式一, 小竹, 土方と共著, 丸善, 1994

岩波講座 現代工学の基礎15 計算熱流体力学<空間系Ⅲ>, 笠木伸英, 松本洋一郎, 大橋弘忠, 岩波書店, 2002

MULTIPHASE FLOW HANDBOOK, Edited by Clayton T. Crowe, CRC Taylor & Francis, 12.2, 2005

### 大学院教育学研究科・教育学部

金子 元久 教授

(任期：平成18年4月1日～平成20年3月31日)

昭和47年 教育学部卒業

昭和59年 シカゴ大学大学院修了 Ph. D.

平成8年 教授

所属：総合教育科学専攻大学経営政策・コース

専門分野：高等教育論、比較教育学、教育経済学

研究内容(代表的な著書や論文等)：

“Japan’s Higher Education: The Past, Its Legacies and the Future,” P.Altbach & T. Umakoshi eds. Past and Future of Asian Higher Education : Baltimore: Johns Hopkins University Press, 2004. pp. 115-14

「国立大学法人化の射程」、江原武一編『大学の管理運営改革』、東信堂、2004. pp.49-71.

「高等教育の地殻変動と大学の戦略的経営」、『高等教育研究紀要』19. (2004年3月)、pp.87-100.

「評価主義的陥弊：模倣市場化と大学評価」、『教育と経済』74 (2003年第4期)、2003年10-12月、pp.1-8.

「初等教育の発展課題—日本の経験と発展途上国への視点」、米村明夫編『世界の教育開発』、明石書店、2003、pp.27-41.

## 大学院薬学系研究科・薬学部

### 柴崎 正勝 教授

(任期：平成18年4月1日～平成20年3月31日)

昭和44年3月 薬学部卒業

昭和49年3月 薬学系研究科博士課程修了

昭和61年10月 教授 (北海道大学)

平成3年10月 教授 (薬学部)

所属：有機合成化学教室

専門分野：有機合成化学、医薬化学

研究内容 (代表的な著書や論文等) :

- 1) M. Shibasaki, H. Sasai and T. Arai  
Asymmetric Catalysis with Heterobimetallic Compounds  
Angew. Chem. Int. Ed. Engl., 36, 1236-1256 (1997)
- 2) Shibasaki and N. Yoshikawa  
Lanthanide Complexes in Multifunctional Asymmetric Catalysis  
Chem. Rev., 102, 2187-2209 (2002)
- 3) M. Shibasaki, M. Kanai and K. Funabashi  
Recent progress in asymmetric two-center catalysis  
Chem. Commun., 1989-1999 (2002)
- 4) M. Shibasaki  
Chiral poly-rare earth metal complexes in asymmetric catalysis  
Proc. Jpn. Acad. Ser. B, 82, 72-85 (2006)
- 5) M. Shibasaki and S. Matsunaga  
Design and Application of Linked-BINOL Chiral Ligands in Bifunctional Asymmetric Catalysis  
Chem. Soc. Rev., 35, 269-279 (2006)

## 大学院情報学環・学際情報学府

### 吉見 俊哉 教授

(任期：平成18年4月1日～平成21年3月31日)

昭和56年3月 教養学部卒業

昭和59年3月 大学院社会学研究科修士課程修了

平成12年8月 教授 (社会情報研究所)

所属：社会情報学圏 社会学・歴史・教育 情報文化・歴史学域

専門分野：社会学・文化研究・メディア史

研究内容 (代表的な著書や論文等) :

- 『都市のドラマトゥルギー』(1987年)
- 『博覧会の政治学』(1992年)
- 『メディア時代の文化社会学』(1994年)
- 『カルチュラル・ターン』(2003年)
- 『万博幻想』(2005年)

## 東洋文化研究所

### 関本 照夫 教授

(任期：平成18年4月1日～平成21年3月31日)

昭和47年3月 教養学部卒業

昭和51年1月 大学院社会学研究科博士課程退学

平成3年4月 教授 (東洋文化研究所)

所属：汎アジア研究部門

専門分野：文化人類学

研究内容 (代表的な著書や論文等) :

- 『現代の社会人類学』全3巻  
(共編著、東京大学出版会)
- 『国民文化が生れる時—アジア・太平洋の現代とその伝統』(編著、リプロポート)
- 『比較史のアジア—所有・契約・市場・公正』  
(共編著、東京大学出版会)

## 部局長退任の挨拶

### 退任にあたって

前大学院工学系研究科長・工学部長

平尾 公彦

東京大学は質の高い教育と研究を維持し、国際性豊かで真のリーダーシップを備えた人材を世に送り出すこと、世界の知的拠点として21世紀の新たな価値の発見と構築に向けてダイナミックに取り組むことが求められています。大学の本質を見失った組織、運営は大学を駄目にします。大学の本質は優秀な頭脳集団をもつことと、外部からの干渉を排除して研究教育が行えることです。これからは一研究者として東京大学の発展に貢献したいと思っています。2年間、多くの方々からご支援をいただきました。本当にありがとうございました。

## 全学の協力と支援に感謝

前大学院教育学研究科長・教育学部長

佐藤 学

研究科長に就任して以来、ひたすら走り続けた2年間でした。法人化の状況は、教育学研究科のように小さな部局にとっては、新しい体制への移行自体が死活問題であり、文字通り不安と激動の2年間でした。幸い、平成16年に臨床心理学コースの新設、平成17年に大学経営政策コースの新設、そして平成18年に学校教育高度化専攻の新設が実現し、1専攻6コースであった本研究科を2専攻11コースへと拡充させることができました。これらの改革に惜しめない協力と支援をお寄せくださった総長室、本部事務局、他研究科の諸先生方に、この場を借りて心から感謝申し上げます。思えば、わが研究科の進取の力のすばらしさと東京大学全体の協力関係のすばらしさに感嘆し続けた2年間でした。学生と院生に対する教育の改善についてはやり残した課題は多いのですが、これからは一教授として尽力し、微力ながら東京大学の発展に貢献し続けたいと思っています。

## 研究科長・学部長退任にあたって

前大学院薬学系研究科長・薬学部長  
海老塚 豊

国立大学法人となった最初の2年間に部局長を務めるという大役を与えられ、これまで経験したことのない仕事に追いかけているうちに、当初はとてつもなく長く感じていた任期も、あっという間に過ぎてしまった、というのが現在の実感です。法人化対応に加え、ちょうどこの間に6年制学科を導入する薬学教育の新制度が正式に決定し、東大だけでなくわが国における薬学にとって歴史的な転換期にあたったこと、さらに、新総合研究棟の建設、旧館の改修およびそれらに伴う移転と、数々の大きな事業を抱え、途方にくれたように感じた日々があったことが懐かしく思い出されます。幸い、薬学の教職員学生のみならず、学内外の方々の温かいご支援を得て、無事これらの事業を乗り切り、任期を迎えることができました。これからの薬学は、伝統的な創薬基礎研究で世界のトップランナーとなるだけでなく、高度医療人としての薬剤師の養成も併せて行ってゆくこととなります。薬学教育研究機関として世界にも例のないユニークな存在として、東大の更なる発展に貢献してゆくことを確信しております。ご協力いただきました皆様に深く感謝し、厚く御礼申し上げます。

## デューティー

前大学院情報学環長・学際情報学府長  
花田 達朗

個人と組織の関係をそのせめぎ合い中でどう折り合いを付けるかは永遠の課題であろう。大学もその現場たるを免れない。いや、最も厄介な現場の一つかもしれない。旧社会情報研究所最後の所長を1年間、それと組織統合した新生情報学環の学環長を2年間務めて退任する。と同時に本学を退職し、新天地へ移る。感慨なきにしもあらず、である。

私はデューティーというものが自分に降ってくると、めっぽう弱い。個人と組織の間を繋ぐ一つの橋がデューティーである。情報学環長のデューティーは、学際情報学という新規分野のために全学協力体制のもとに設計され、横型組織論で構成されたユニークな大学院の基盤を整備し、そこに集う教職員と学生がそれぞれの夢を叶えられるような条件作りをすることだった。その達成度の評価は他者に委ねるとして、私としてはI have done my duty.という気持ちでこの現場を辞去する。ご支援いただいた方々に深くお礼を申し上げたい。

情報学環という船の無事の航海と新大陸の発見を願ってやまない。

## 退任にあたって

前東洋文化研究所長  
田中 明彦

おかげさまでというべきか、所長を二期4年間務めさせていただいた。その間、法人化に向けての本部の作業にも関与させていただいたし、法人化後は、経営協議会や総長選考会議の末席をけがさせていただくことにもなった。東京大学がいかに巨大で複雑な組織であるということが、薄ぼんやりと感じられるようになったと思う。人間の営みを学ぶ政治学の研究者にとっては、貴重な経験だった。ただし、やはり研究者としてのアイデンティティと利己心には抗しがたく、いたるところで「手抜き」をしてしまった。所長室の机上で行方不明になった書類のために、事務職員の皆さんには、しなくてもいい仕事を相当お願いしてしまったと思う。罰があたったのか、任期終了近くなって、ドタバタ物事を決めなければいけない事態も起こった。「ハラハラドキドキの4年」が終わってホッとされる所内の方々も多いにちがいない。

「業務改善提案」に係る表彰式が3月27日（月）14時より、本部棟12階大会議室で開催された。

業務改善提案は、本学の業務改善に関する具体的な提案を広く教職員から募集し、今後の業務運営の合理化・効率化等に資することを目的として実施されたものであり、今回で3回目となる。昨年10月から11月にかけて募集が行われ、11月末までに個人・グループ合わせて105件の応募があった。

応募のあった提案については、濱田理事を本部長とする「業務改善プロジェクト推進本部」において、審査が行われ、その結果、下記のとおり、特選：個人1名、入選：個人6名に対して表彰することになった。

表彰式では、小宮山総長・濱田理事・西尾理事・上杉理事・石黒監事・弦本企画調整役（現・副理事）等の出席のもと、小宮山総長から総評が行われた後、表彰状と副賞が授与された。

○特選受賞者（個人1名（1提案））

<個人>

釣巻 勉 監査室

（人事異動の時期を原則7月1日（仮）とする）

○入選受賞者（個人6名（4提案））

<個人>

・今橋大樹 医学部附属病院

（事務系職員の人事異動時期について）

・入江宜孝 医学部附属病院

（短時間勤務有期雇用職員の時間給額の決定方法について）

・米田久和 北海道演習生

（物品の再利用）

・大八木繁則 学生部

（本学資源の有効活用について）

・市原育代 財務部

（物品の契約実績照会について）

・小暮弥生 教育学部

（教職業務体系の改善について）

表彰者の提案内容など業務改善提案に関する詳細は、[http://www.adm.u-tokyo.ac.jp/gakunai/gen/gen6/index\\_j.html](http://www.adm.u-tokyo.ac.jp/gakunai/gen/gen6/index_j.html)をご参照下さい。

なお、業務改善提案については、今後も定期的に募集いたします（次回は、今年5月募集の予定）が、期間内か否かにかかわらず、随時受け付けておりますので、総務部業務改善グループ（メールアドレス：gyoumukaizen@ml.adm.u-tokyo.ac.jp）へ提案書をお送り下さい。



小宮山総長から表彰状を受ける受賞者

平成17年7月4日、八丈島ナズマド地区で本学大学院農学生命科学研究科水圏天然物化学研究室のリサーチフェロー、山下高広氏が潜水しての試料サンプリング中に殉職されたことは平成17年9月14日付の学内広報で報じたとおりである。この学内広報で本学の取り組みについては徹底した原因究明と再発防止のため、学外第三者を加えた全学調査委員会を設置し、事故の直接的な要因のみならず、事故の根底や大学の安全風土にまで遡って調査検討を行いその結果を公表すると、報告した。

本学では元広島高裁長官の藤田耕三氏に委員長をお願いして全学調査委員会を発足させ、第一回の委員会を平成17年10月31日に開催した。委員会は公開として傍聴者を受け入れ、合計6回開催した。この他に八丈島現地調査やBCジャケットの点検調査を行った。

全学調査委員会のメンバーは下記の6名からなり、法律、安全管理、潜水事故それぞれの分野の専門家を学外委員としてお願いしている。

（学外委員）藤田 耕三（弁護士、元広島高裁長官、現都労委会長）

（ ）向 殿 政 男（明治大学理工学部情報学科システム科学研究室教授）

（ ）中 田 誠（総合スポーツ研究所）

（学内委員）桐 野 豊（理事・副学長）

（ ）生源寺 眞一（農学生命科学研究科教授、研究科事故調査委員長）

（ ）小山 富士雄（環境安全本部特任教員、元三菱化学環境安全部部长）

調査報告書は平成18年3月30日、藤田委員長より小宮山総長に提出され、同時に記者発表し併せて本学ホームページ（広報・情報公開－記者発表一覧）でも公表されている。

報告書の内容は下記のとおりである。

1. 山下高広氏の研究テーマと潜水作業との関連
2. 潜水作業事故の経緯（事故前日まで、事故発生、捜索救命活動の経緯）
3. 事故の直接原因推定と捜索救命活動の妥当性
4. 安全対策の不備（潜水作業の危険性認識欠如、安全管理体制と教育の欠如）
5. 再発防止策についての提言（作業現場責任者及び研究室責任者の責務、農学生命科学研究科及び東京大学全学としての責務、全国の大学が連携しての取り組み及び社会に発信すべき事項）

今後の取り組みとして、調査報告書の内容及び再発防止策についての学内報告会を開催するとともに、潜水作業のみならず野外作業の事故発生防止のための情報発信や各種啓発活動を行っていくこととしている。



第4回調査委員会（1月23日）の審議状況

### 平成18年度の学内広報発行スケジュール

号数	原稿締切日	発行日	配布日
1335	4月19日（水）	4月26日（水）	5月8日（月）
1336	5月10日（水）	5月17日（水）	5月23日（火）
1337	5月24日（水）	5月31日（水）	6月6日（火）
1338	6月7日（水）	6月14日（水）	6月20日（火）
1339	6月21日（水）	6月28日（水）	7月4日（火）
1340	7月5日（水）	7月12日（水）	7月19日（水）
1341	7月19日（水）	7月26日（水）	8月1日（火）
1342	9月6日（水）	9月13日（水）	9月20日（水）
1343	9月20日（水）	9月27日（水）	10月3日（火）
1344	10月4日（水）	10月11日（水）	10月18日（水）
1345	10月18日（水）	10月25日（水）	10月31日（火）
1346	10月31日（火）	11月8日（水）	11月14日（火）
1347	11月15日（水）	11月22日（水）	11月29日（水）
1348	学生生活実態調査特集号（予定）		
1349	12月6日（水）	12月13日（水）	12月19日（火）
1350	1月10日（水）	1月17日（水）	1月23日（火）
1351	1月24日（水）	1月31日（水）	2月6日（火）
1352	2月7日（水）	2月14日（水）	2月21日（水）
1353	2月21日（水）	2月28日（水）	3月6日（火）
1354	3月7日（水）	3月14日（水）	3月20日（火）

## ニュースページ、インフォメーションページへの記事提出要領

「学内広報」は皆さんに送っていただく記事で作られています。下記の提出要領により、積極的に学内の情報をお寄せください。

### 1. 提出方法

記事は、各部局の広報担当者とおして、メールの添付ファイルとしてデータで送付すること。

### 2. 提出先

総務部広報課

E-mail : kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp

### 3. 締切日

原則として各月第1・3水曜日を原稿の締切日とする（配布は翌々週の火曜日）。ただし祝日等により変更となる場合があるため、HPで発行スケジュールを確認すること。

### 4. 提出の際の留意事項

#### (1) 文字数

文字数は記事1件につき800字を目安とし、内容により増減は可とする。

#### (2) 写真

- ① 写真を掲載する場合はキャプション（説明文）を25文字以内で添えること。
- ② 写真を電子データで提出する場合、Wordファイルなどに貼り付けず、JPEGなどの形式による元の画像ファイルを送付すること。
- ③ 写真は電子データがない場合プリントのものも掲載可とする。

#### (3) 書式

- ① 原稿は1行25文字の書式で作成すること（ただし、大きな図表などが含まれる場合はこの限りではない）。
- ② 原稿のはじめに担当部局名と記事タイトルを記載すること。
- ③ 記事タイトルは極力簡潔でわかりやすいものとする。

#### (4) 文章表現のきまり

- ① 既に行われた行事や決定した事項などの報告記事は、「である調」を用いること。
- ② これから行われる行事や募集などのお知らせは、「ですます調」を用いること。
- ③ 句読点は「、」「。」を用いること（「,」「.」は用いない）。
- ④ 時間は24時間表記とし、日付には括弧書きで曜日をつけること。
- ⑤ このほか、特に表記する必要のない「平成●年」は削除する、特に支障がない限り「東京大学」は「本学」とするなど、表記の統一のための修正を編集段階において行う。

### 5. 問い合わせ先

総務部広報課広報企画チーム

TEL : 03-3811-3393 内線22031

E-mail : kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp

# キャンパス ニュース



## 学生部



### 第2次学力試験（後期日程）、外国学校卒業学生特別選考の合格者発表

平成18年度本学入学者選抜の第2次学力試験（後期日程）合格者332人及び外国学校卒業学生特別選考合格者第1種（外国人であって日本国の永住許可を得ていない者）15人、第2種（日本人及び第1種以外の外国人）24人の受験番号が、3月22日（水）12時30分に、本郷構内で掲示により発表された。また、併せて、合格者の科類別成績（最高点・最低点・平均点）も発表された。

合格者は、3月24日（金）から27日（月）までの間、郵送により入学手続きを行い、3月28日（火）の健康診断及び4月1日（土）からの諸手続きを済ませ、4月12日（火）の日本武道館での入学式に臨むことになる。

第2次学力試験（前期日程・後期日程）及び外国学校卒業学生特別選考の志願者数・合格者数等は、次のとおりである。

#### 平成18年度第2次学力試験（前期日程・後期日程）募集人員・合格者数等

科 類	募集人員	志願者数	第1段階選抜合格者数	受験者数	合格者数
文科一類	415	2,472	1,336	1,323	416
文科二類	365	1,771	1,182	1,171	366
文科三類	485	2,502	1,563	1,536	489
理科一類	1,147	4,789	3,189	3,124	1,170
理科二類	551	2,809	2,032	1,991	569
理科三類	90	608	373	359	90
合 計	3,053	14,951	9,675	9,504	3,100

(注) 外国学校卒業学生特別選考を除く。

#### 平成18年度第2次学力試験（前期日程）募集人員・合格者数等

科 類	募集人員	志願者数	第1段階選抜合格者数	受験者数	合格者数	合格者科類別成績		
						最高点	最低点	平均点
文科一類	373	1,549	1,124	1,116	373	430.4759	350.0204	372.0097
文科二類	327	1,099	985	984	328	446.1869	333.8982	356.3438
文科三類	432	1,521	1,296	1,289	435	417.3536	329.7205	349.3943
理科一類	1,025	2,705	2,563	2,556	1,045	454.6758	324.6760	355.0478
理科二類	492	2,170	1,730	1,713	507	437.3981	323.1094	348.8029
理科三類	80	433	323	316	80	488.7203	394.9647	417.4049
合 計	2,729	9,477	8,021	7,974	2,768			

(注) 外国学校卒業学生特別選考を除く。

平成18年度第2次学力試験（後期日程）募集人員・合格者数等

科 類	募集人員	志願者数	第1段階選抜 合格者数	受験者数	合格者数	合格者科類別成績		
						最高点	最低点	平均点
文科一類	42	923	212	207	43	316	247	263.72
文科二類	38	672	197	187	38	270	222	235.84
文科三類	53	981	267	247	54	338	248	274.02
理科一類	122	2,084	626	568	125	465	318	344.86
理科二類	59	639	302	278	62	295	231	249.58
理科三類	10	175	50	43	10	306	260	276.20
合 計	324	5,474	1,654	1,530	332			

(注) 外国学校卒業学生特別選考を除く。

平成18年度外国学校卒業学生特別選考志願者数・合格者数等

科 類	区分 種別	志願者数	第1次選考 合格者数	第2次選考 受験者数	第2次選考 合格者数
	文科一類				
	第2種	32	15	14	9
文科二類	第1種	27	7	7	4
	第2種	16	7	6	3
文科三類	第1種	12	3	3	2
	第2種	17	11	9	4
理科一類	第1種	32	11	10	5
	第2種	21	11	9	3
理科二類	第1種	8	4	4	3
	第2種	9	8	7	5
理科三類	第1種	1	0	0	0
	第2種	7	2	2	0
合 計	第1種	85	27	26	15
	第2種	102	54	47	24

なお、過去3年間の志願者数及び合格者数、高校卒業年別の合格比率、出身校所在地別合格者及び比率は次のとおりである。

入学志願者数及び合格者数の推移

年度等 科類	平成18年度				平成17年度				平成16年度									
	志願者		合格者		志願者		合格者		志願者		合格者							
	前期	後期	計	前期	後期	計	前期	後期	計	前期	後期	計						
文科一類	1,549	923	2,472	373	43	416	1,458	785	2,243	373	43	416	1,235	1,079	2,314	373	43	416
文科二類	1,099	672	1,771	328	38	366	1,094	660	1,754	329	38	367	1,094	536	1,630	329	38	367
文科三類	1,521	981	2,502	435	54	489	1,451	923	2,374	435	54	489	1,708	1,107	2,815	435	53	488
理科一類	2,705	2,084	4,789	1,045	125	1,170	2,884	1,998	4,882	1,046	125	1,171	2,718	1,968	4,686	1,039	124	1,163
理科二類	2,170	639	2,809	507	62	569	1,843	603	2,446	507	62	569	1,941	610	2,551	502	62	564
理科三類	433	175	608	80	10	90	426	149	575	80	10	90	480	155	635	80	10	90
合計	9,477	5,474	14,951	2,768	332	3,100	9,156	5,118	14,274	2,770	332	3,102	9,176	5,455	14,631	2,758	330	3,088

(注) 外国学校卒業学生特別選考を除く。

高校卒業年別の合格率

科 類	区 分	平成18年度		平成17年度		平成16年度	
		前期	後期	前期	後期	前期	後期
文科一類	現 役	69.4 %	48.8 %	67.3 %	58.1 %	66.1 %	75.9 %
	1 浪	27.3	32.6	27.9	25.6	29.8	22.5
	2 浪	2.4	9.3	3.1	7.0	2.2	1.1
	3浪以上等	0.9	9.3	1.7	9.3	1.9	0.6
文科二類	現 役	66.5	57.9	65.6	65.8	64.6	62.9
	1 浪	31.4	36.8	32.0	28.9	30.5	33.7
	2 浪	1.2	0.0	1.1	2.6	4.1	1.8
	3浪以上等	0.9	5.3	1.3	2.7	0.8	1.5
文科三類	現 役	65.3	74.1	66.3	50.0	62.0	69.7
	1 浪	31.5	11.1	29.2	33.3	31.3	25.5
	2 浪	1.8	1.9	1.8	3.7	3.1	3.7
	3浪以上等	1.4	12.9	2.7	13.0	3.6	1.1
理科一類	現 役	74.8	72.8	74.6	69.6	69.5	69.1
	1 浪	23.3	24.0	23.4	26.4	26.6	28.2
	2 浪	1.1	2.4	1.3	2.4	2.6	1.7
	3浪以上等	0.8	0.8	0.7	1.6	1.3	1.0
理科二類	現 役	67.5	54.8	66.1	54.8	61.0	60.4
	1 浪	27.6	27.4	27.6	38.7	33.2	33.9
	2 浪	2.2	4.8	2.5	1.6	3.3	3.6
	3浪以上等	2.7	13.0	3.8	4.9	2.5	2.2
理科三類	現 役	71.3	30.0	66.7	60.0	64.4	63.8
	1 浪	22.5	40.0	24.4	20.0	17.8	30.0
	2 浪	2.5	20.0	4.4	20.0	5.6	6.3
	3浪以上等	3.7	10.0	4.5	0.0	12.2	0.0
合 計	現 役	70.2	63.6	69.5	61.4	65.6	67.6
	1 浪	26.9	25.6	26.7	29.8	29.2	28.8
	2 浪	1.7	3.9	1.9	3.0	3.0	2.4
	3浪以上等	1.2	6.9	1.9	5.8	2.2	1.1

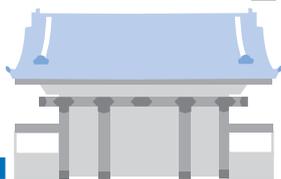
(注) 外国学校卒業学生特別選考を除く。

出身校所在地別合格者数及び比率

	平成18年度			平成17年度			平成16年度			
	前期		計	前期		計	前期		計	
	合格者数	比率		合格者数	比率		合格者数	比率		
東 京	人 847	% 30.6	人 977	% 31.5	人 932	% 33.6	人 1,057	% 34.1	人 1,019	% 33.0
北 海 道	38	1.4	44	1.4	42	1.5	45	1.5	8	2.4
東 北	83	3.0	95	3.1	86	3.1	97	3.1	7	2.1
関 東 東京を除く	464	16.7	539	17.4	507	18.3	579	18.7	52	15.8
北 陸	126	4.6	131	4.2	96	3.5	108	3.5	14	4.2
中 部	308	11.1	334	10.8	258	9.3	284	9.2	31	9.4
近 畿	384	13.9	425	13.7	354	12.8	391	12.6	36	10.9
中 国	158	5.7	168	5.4	131	4.7	144	4.6	18	5.5
四 国	80	2.9	83	2.7	84	3.0	91	2.9	12	3.6
九 州 沖縄を含む	272	9.8	289	9.3	262	9.5	286	9.2	18	5.5
検 定 その他	8	0.3	15	0.5	18	0.7	20	0.6	6	1.8
合 計	2,768	100.0	3,100	100.0	2,770	100.0	3,102	100.0	330	100.0
									2,758	100.0
									3,088	100.0

(注) 外国学校卒業学生特別選考を除く。

## 部局 ニュース



### 大学院医学系研究科・医学部

医学部附属病院管理・研究棟及び外来診療棟のライトアップ点灯式が行われる

3月30日（木）18:00から、病院管理・研究棟正面玄関前の特設会場において「管理・研究棟及び外来診療棟のライトアップ点灯式」が開催された。

夜間照明装置の設置にあたっては、夜間における明るく安心な病院環境の確保を目的としているが、同時に歴史と伝統を照らし出す効果もあることから、多数の教職員からの賛同と寄附により実現の運びとなった。

点灯式に当たり永井病院長から設置に至るまでの経緯等挨拶が述べられた後、今回のライトアップのデザイン設計、施工管理を担当頂いた株式会社石井幹子デザイン事務所主宰 石井幹子氏、永井病院長、定年退職者、新規採用者が会場において武田管理課長のカウントダウンの合図と共に放電灯のスイッチを押して夜間照明の点灯が行われた。



点灯式の模様（永井病院長、石井幹子氏ほか）

続いて、石井幹子氏から今回のライトアップのデザインについて、管理・研究棟最上階にある南・北のレリーフ「長崎への医学の伝来：日名子實三・作（ひなごじつぞう）」と「診療・治療・予防：新海竹蔵・作（しんかいだけぞう）」を照明によってより鮮明に浮かび上がらせることにより、御殿下記念館からグランドを通して見る管理・研究棟の夜景は、あたかも海上に浮かぶ巨大船を思わす荘厳な風景となった、との説明をいただいた。

また、点灯式終了後出席者一同は、管理・研究棟と外来診療棟を照らす光の芸術を見学し、併せて爛漫の桜花の中、観桜会が行われ、会は盛況の中に終了した。



御殿下記念館前から管理・研究棟を望む

### 大学院教育学研究科・教育学部

教育学部附属中等教育学校で「2年生総合学習発表会」開催



3月9日（木）10:30から附属中等教育学校の体育館と多目的室において、2年生の総合学習発表会が開催され、3クラスの枠をはずして取り組んだ「体操」・「太鼓」・「演劇」の発表が行われた。70名を超える保護者も見学した。

まず、体育館で42名の生徒による新体操の演技が行われた。外部講師として指導にあたられた、新体操のオリンピックコーチを務める山田美恵子さんと米澤舞子さんも見守るなか、フープ、ボール、リボンの演技が行われた。軽快な音楽に合わせて、生徒たちは息の合った演技を見せた。

つぎに行われた太鼓の発表では、生徒44名が華・波・星の3グループに分かれて、神奈川県三浦半島の三崎に伝わる「ぶちあわせ太鼓」を披露した。生徒たちはこれまで、フリーのピアニストでもある藤本巖さん、熊谷さおりさん、長沢千佐さんの指導のもと練習を重ねてきた。かけ声もさかんにかけながら、体育館に太鼓の勇ましい音を響かせた。総合学習で4年前初めて導入したときから、太鼓をつづけている本校5年生の7名も有志として演技を行い、会場を盛り上げた。太鼓を提供してくださ



躍動感あふれる太鼓の演技

っている川田太鼓工場の川田久義さんが会津よりお越しくださり、本校の発表を高く評価して下さいました。

その後、会場を多目的室に移して、33名が演劇「俺達の甲子園」を公演した。照明や音響にも取り組んだ本格的な舞台上、すばらしい演技をした。生徒たちは努力し

て練習した教員・父親・母親の役もみごとにこなし、観客から大きな拍手をいただいた。

社会科学研究所  
第20回社会科学研究所シンポジウム  
『失われた10年』を超えてを開催

3月22日（水）14:00から、小柴ホールにおいて、第20回社会科学研究所シンポジウム『失われた10年』を超えてが開催された。



シンポジウムの様子

社会科学研究所は、2000～2004年度に「失われた10年？ 1990年代日本をとらえなおす」というテーマのもとに、全所的プロジェクト研究を実施した。その成果は、参加スタッフの著書・論文として続々と発表されているが、このたび、それらのエッセンスを集約する社会科学研究所編『失われた10年』を超えて』（I、II）が東京大学出版会から上梓された。

今回のシンポジウムは、その刊行を記念して企画されたもので、はじめに橋川武郎社会科学研究所教授から「経済危機の教訓」と題して、一般に「失われた10年」と評される1990年代日本を多角的に分析するこの2巻シリーズについての要約があり、続いて堀内昭義中央大学教授、新川敏光京都大学教授、谷口将紀東京大学助教授の各氏から、それぞれの90年代論をふまえた論評をいただいた。当日、約110名を数える参加者が熱心に報告に耳を傾け、シンポジウムの最後の討論時間では、発表者との間で活発な議論が展開された。



討論会の様子

また、シンポジウム終了後、工学部2号館展示室において、発表者・学外参加者を交え和やかなうちに懇親会が行われた。

空間情報科学研究センター  
岡部篤行教授、イラン政府より国際  
イヤー・オブ・ザ・ブック賞を授与  
される

イスラーム書籍文化の進展に努めるイラン政府国際書籍賞事務局は、「ペンを武器に、証明と論理を道具にする勇者に望みを託して」（賞状の一節）、岡部篤行教授（空間情報科学研究センター）編著の『地理情報システムによるイスラーム地域研究』をイスラーム研究部門の最優秀書籍の一冊として選んだと発表した。

イラン国際書籍賞事務局は、毎年、世界中の国々で出版されるイスラーム研究とイラン研究の本を多く収集し、1年間をかけて選考を行い、約10冊の本を選定して表彰している。今年は、その一冊に岡部教授編著（執筆者21名）のIslamic Area Studies with Geographical Information Systems (GIS) (RoutledgeCurzon出版)が、イスラーム研究部門の本として選ばれた。当本は、世界に先駆けてGISをイスラーム研究に適用した研究で、新しい技術でイスラーム研究の新たな地平線を開拓したことが高く評価された。

表彰式は、大統領、閣僚、各国大使、政府要人、研究者、民間人が多く集う盛大なもので、コーランの一節が唱えられた後、賞状の盾が閣僚によりリレー式に手渡され、最後に大統領より直接、受賞者に手渡された。今回の受賞者は、日本人1名の他、英国、ドイツ、ロシア、レバノンなどの研究者10名であった。



イラン大統領から表彰される岡部篤行教授  
(イラン政府提供)

## 競技ダンス部

東京大学競技ダンス部は、1946年に発足して以来、常に学生競技ダンスをリードしてきた伝統ある部です。東京大学と、跡見学園女子大学、東京女子大学、日本女子大学（パートナー校といえます）と共に活動しております。

過去において、全日本戦5連覇、六大学戦10連覇など輝かしい成績を残し、強豪東大の地位は不動のものとなっています。

平成5年に運動会正式部へと昇格しました。

### ○ 競技ダンスの魅力

ダンスは音楽を身体で表現するものです。競技ダンスはそれを他者と競い合える唯一の種目です。



競技ダンスは男と女のダンスなので、種目ごとにストーリーがあります。二人で踊る上でのテクニックも必要です。それらを踏まえ、シルエット・ムーブメント・カウント・アピールの評価基準を満たしながら高い

評価を得られるように努力していく過程が、この競技の醍醐味と言えるでしょう。また、よい演技をしたときに得られる拍手喝采は何物にも代えがたい喜びです。

### ○ 部活動としての楽しさ

学生の競技会には一般の競技会にはない雰囲気・熱気があります。そして、応援してくれる仲間がいます。

先輩・後輩として教え、教えられる関係。上級生として共に部活を運営していく責任。部員として同じ時間を過ごす楽しさを築き、養っていくことができるのが部の長所です。



（競技ダンス部

安武 貴世志）

### ★★★DATA★★★

創立：昭和21（1946）年

人数：75名

練習場所：駒場地区コミュニケーションプラザ

練習日：月・金 16:30～19:30

年間予定：5月 六大学戦 ミニ六大学戦

新歓ダンスパーティー

8月 夏合宿

12月 全日本戦

3月 春合宿

今年度の戦績：六大学戦 2位

東部I部戦 6位

全日本戦 7位

部長：松尾基之（大学院総合文化研究科教授）

HP：http://todaydance.fc2web.com/index.html

## レスリング部

### ○ レスリングって素晴らしい

数多くある東大の運動部の中にレスリング部があることをご存知でしょうか？

上半身が著しく発達した男女が、著しく体にフィットしたユニフォームを着用して行うスポーツというイメージをもたれている方もいらっしゃると思います。

およそ東大生には似つかわしくないと思われるかもしれませんが、僕達レスリング部は明るく、楽しく、激しく練習に取り組んでいます。

レスリングは簡単に言ってしまうと「相手の両肩をマットにつける」ことで勝敗が決まるスポーツです。



単純に思われるかもしれませんが、ところがどっこいなかなか奥が深いスポーツで部員はみなその魅力の虜です。すべての技は「相手の両肩をマットにつける」ためにさまざまな工夫が凝らされていて単なる力だけでは勝つことはできないのです。

### ○ 今後の目標

数年前までは部員が減少し練習もままならない時期もありましたが近年は少子化の波を押し返し、格闘技ブームにも乗って練習も充実しています。



春の東日本学生リーグ戦、秋の六大学戦といった団体戦、春秋の新人戦など大きな試合以外にも区民大会などいくつかの試合があり、それぞれの目標に向けて練習に励んでいます。

特に昨年のリーグ戦では2部リーグでおとしの7位から躍進し4位になり、今年は更なる上位を狙っています。（レスリング部 上月 直之）

### ★★★DATA★★★

創立：昭和48（1973）年

人数：11名

練習場所：駒場地区第一体育館1階柔道場マット上

練習日：月・土（一回2・3時間程度）

年間予定：5月 東日本大学リーグ戦

6月 東日本春季新人戦

8月 夏合宿

10月 東京六大学対抗戦

11月 東日本秋季新人戦

その他、区民大会、新入生歓迎会や納会など。

今年度の成績：団体 東日本大学リーグ戦 2部4位

東京六大学対抗戦 5位

個人 春季新人戦 60kg級 準優勝

杉並区大会 74kg級 優勝

部長：古田元夫（大学院総合文化研究科教授）

HP：http://www.geocities.co.jp/Athlete/2966/

# 調達本部です



## 第6回 調達本部17年度活動報告

年度が変わりました。調達本部も発足から1年たちました。過去の調達実績調べから始まり、重点分野の特定、対策の検討そして試行と進んでまいりました。既に、学内広報でも一部紹介しましたが、あらためて調達本部初年度の数字による活動報告です。

(単位:千円)

区分	調達品名	前回契約額 当初見積額	17年度 契約額	節減額	節減率
事務用品	本部事務用品(WEB発注方式)	11,665	10,382	1,283	11.0%
図書	全学資料購入集中処理システム	116,700	109,700	7,000	6.0%
修繕	消防設備修繕	6,090	4,160	1,930	31.7%
印刷	東大の概要・職員名簿	7,110	5,670	1,440	20.3%
	東大友会ニュース第3号	8,500	7,257	1,243	14.6%
	東大友会ニュース第4号	10,893	7,348	3,545	32.5%
	18年度東大入学者募集要項	4,410	4,158	252	5.7%
	18年度東京大学学部便覧	6,078	5,365	713	11.7%
	東大史料編纂所研究所紀要	1,365	1,200	165	12.1%
	留学生の手引き2006	1,995	1,335	660	33.1%
	東洋文化研究所紀要	1,500	834	666	44.4%
	東大友会ニュース5号	8,979	6,261	2,718	30.3%
	留学生のための入学案内	2,197	1,276	921	41.9%
	18年度東京大学大学院便覧	4,761	4,725	36	0.8%
	授業カタログ	4,400	2,934	1,466	33.3%
	夏学期科目紹介時間割表	1,620	1,619	1	0.1%
	その他4件	4,562	3,543	1,019	22.3%
		小計	68,370	53,525	14,845
移転	医学部移転	128,000	84,962	43,038	33.6%
	工学部11号館物品移転	7,154	6,531	623	8.7%
	工学部新2号館への移転	74,230	19,478	54,752	73.8%
	薬学部本館改修に伴う移転	6,878	1,029	5,849	85.0%
	本部二号棟への移転	4,634	1,470	3,164	68.3%
	小計	220,896	113,470	107,426	48.6%
施設関連	教養学部 AV設備整備	21,181	14,574	6,607	31.2%
	文学部3号館空調設備改修工事	86,100	56,700	29,400	34.1%
	駒場Iラクビー場改修工事	110,000	86,100	23,900	21.7%
	小計	217,281	157,374	59,907	27.6%
17年度合計		641,002	448,611	192,391	30.0%

調達改善に取り組んだことで、17年度予算から2億円ほどのコストダウン実績がありました。18年度は、いよいよ事務用品、OA・パソコンなどの購入にも範囲を広げて調達改善を実施してまいります。

ご協力をよろしく申し上げます!

調達本部連絡先 ☎22148 櫻井

# INFORMATION

## シンポジウム・講演会

### シンポジウム・講演会

医学部附属病院

#### 先端医療開発研究クラスター(第2回)ナノバイオ・インテグレーション研究拠点合同シンポジウム

先端医療開発研究クラスター及びナノバイオ・インテグレーション研究拠点では、下記により合同シンポジウムを開催します。

今回の合同シンポジウムは、トランスレーショナル研究の拠点として、さらに発展させていくために、Exhibition(展示)を中心としています。各ユニットが様々な研究成果を展示し、皆様に御報告します。

また、企業等の共同研究に向けての打合せの場を設け、具体的に産学連携を図ることを計画しています。多数のご参加をお待ちしています。

開催日: 4月21日(金)

場所: 工学部新2号館

時間:

展示会 13:00 ~

講演会 15:00 ~

①小宮山 宏: 東京大学総長

「東京大学として産学連携の今後の進展に向けての大学のあり方」(仮題)

②岸 輝雄: 独立行政法人物質材料研究機構理事

「研究開発型独立行政法人におけるCOEの役割とネットワーク」(仮題)

③松田 岩夫: 国務大臣

科学技術政策・食品安全・IT担当

「産学連携 大学に期待すること」(仮題)

懇親会 18:30 ~

- ※ 展示会・講演会は参加費無料です。
- ※ 懇親会は参加費 1,000円となっております。
- ※ お申し込みの際は、展示会、講演会、懇親会それぞれお申し込み下さい。
- ※ 講演会は定員になり次第締め切らせていただきます。

**お問い合わせ先：**

医学部附属病院  
 先端医療開発研究クラスターシンポジウム事務局  
 TEL：03-5800-9188 FAX：03-5800-9193  
 E-mail：pr@adm.h.u-tokyo.ac.jp

シンポジウム・講演会

大学院法学政治学研究科・法学部

**法学部連続講演会「高齢化社会と法」開催のお知らせ**

法学部は、「高齢化社会と法」を統一テーマに連続講演会を開催します。毎月1回、1年間に合計8回の予定で、年金・住宅・医療・介護などをめぐる法的・政策的問題、さらには高齢化が政治に及ぼす影響などについて法学部の教授・助教授をはじめとする専門家が講演をおこないます。本学の学生・教職員はもちろん、一般の皆様方の聴講も歓迎します。奮ってご参加ください。

**日時およびテーマ：**

**第1回**

5月13日（土）13:30～15:00（受付：13:00～）  
 「高齢化社会と法：総論」  
 講師：岩村正彦（法学部教授）

**第2回**

6月17日（土）13:30～15:00（同上）  
 「高齢化社会と政治」  
 講師：田邊國昭（法学部教授）

**第3回**

7月15日（土）13:30～15:00（同上）  
 「高齢化社会の消費者問題・成年後見」  
 講師：大村敦志（法学部教授）  
 （第4回目以降は、9月、10月、11月、12月、1月の土曜日開催を予定していますが、具体的な日時、テーマおよび講師は後日決定します）

**場 所：**本郷キャンパス法学政治学系総合教育棟  
 （通称：法科大学院ガラス棟）101教室

**参加資格：**「高齢化社会と法」に興味がある方。  
 身分・年齢等は問いません

**参加費：**無料

**資 料：**毎回会場でお配りします

**申込方法：**

①お名前（ふりがな）、②ご連絡先メールアドレスまたはFAX番号、③どの回の聴講を希望するか（※）、を明記のうえ、大学院法学政治学研究科附属ビジネスロー・比較法政研究センター宛にメール（icclpblc@j.u-tokyo.ac.jp）またはFAX（03-5805-7143）でお申し込みください。定員（100名）に達し次第、締め切らせていただきます。

※興味のある回のみでの聴講、すべての回の連続聴講、どちらでも結構です。

主 催：東京大学法学部  
 後 援：日本サムスン株式会社

シンポジウム・講演会

大学院理学系研究科・理学部

**理学部 第9回公開講演会開催のお知らせ**

理学部ではいろいろな研究が行われています。すべてに共通するのは、自然界の真理を探求するというのですが、私たちの日常からかけ離れた世界から、私たちの社会生活と密接につながった問題まで、研究の対象も、手法も、千差万別です。そうしたさまざまな基礎科学研究の最新的话题を、最先端で活躍している研究者が分かりやすく解説します。

●**テーマ** 「理学研究のさまざまな面白さ」

●**講演内容**

宇宙のはじまりに迫る

「加速器で解明する素粒子と宇宙の謎」

駒宮幸男（こまみや さちお・理学系研究科  
 物理学専攻・教授）

地球史の謎を探る

「巨大天体衝突による環境擾乱と生物絶滅」

多田隆治（ただ りゅうじ・理学系研究科  
 地球惑星科学専攻・教授）

新技術を実現する

「世界最高速の計算と通信を目指して」

平木敬（ひらき けい・情報理工学系研究科創造情報学専攻／理学部情報科学科・教授）

●**日 時** 4月21日（金）18:00～20:30（17:00開場）

●**場 所** 駒場キャンパス 数理科学研究科大講義室

●**参加費** 無料（当日先着240名）

●**主催・問い合わせ先**

大学院理学系研究科・理学部

電話 03-5841-7585

e-mail shomu@adm.s.u-tokyo.ac.jp

URL <http://www.s.u-tokyo.ac.jp/pl9/>

# お知らせ

## お知らせ

大学院総合文化研究科・教養学部

「教養学部報」第492（4月5日）号の発行  
——教員による、学生のための学内新聞——

「教養学部報」は、教養学部の正門傍、掲示板前、学際交流棟ロビー、生協書籍部、保健センター駒場支所で無料配布しています。バックナンバーもあります。

第492（4月5日）号の内容は以下のとおりとなっていますので、ぜひご覧ください。

小宮山宏：東京大学は変わる  
木畑洋一：眼を世界に放つ  
江里口良治：ダーク・エイジの先に光はあるのか  
平石 界：学生相談所  
里見大作：進学情報センター  
宮内由美子：留学生の紹介  
兵頭俊夫：駒場図書館案内  
池田信雄：美術博物館案内  
山口和紀：情報教育棟  
石川 隆：保健センター駒場支所  
廣松 毅：〈学び方〉新シリーズ 統計学の学び方  
和田 健：公開シンポジウム「東京大学教養学部における基礎実験教育」—平成18年度に向けた取り組み—の報告  
上村慎治：基礎実験の楽しみ方（生物）  
斎藤兆史：駒場のレストラン・喫茶店案内〈改訂版〉

〈私のいち押し〉

安西信一：辻惟雄『日本美術の歴史』

〈本の棚〉

安富 歩：岡山裕著『アメリカ二大政党制の確立——再建期における戦後体制の形成と共和党』

〈時に沿って〉

志波智生：私の履歴書  
堺 和光：物理とともに  
若杉桂輔：チャンスを活かすために

〈辞典案内〉

アルヴィ宮本なほ子：英語  
幸田 薫：ドイツ語  
松村 剛：フランス語  
安岡治子：ロシア語  
西中村浩：ポーランド語  
村松真理子：イタリア語  
スペイン語部会：スペイン語  
木村秀雄：ポルトガル語  
大貫 隆：古典語（ギリシア語・ラテン語）  
吉川雅之：現代中国語  
野村剛史：国語辞典  
齋藤希史：漢和辞典  
生越直樹：韓国朝鮮語  
杉田英明：アラビア語  
藤井 毅：ヒンディー語  
中井和夫：ウクライナ語  
柴 宜弘：セルビア・クロアチア語  
上村 静：ヘブライ語  
王 嵐：台湾語  
木村理子：モンゴル語  
吉川雅之：広東語  
楊 凱榮：上海語



## 「噴水」のコーナーに投稿を！

「噴水」のコーナーは、本学の学生や教職員にかかわる様々な出来事を、皆様からの投稿によるコラムとして紹介するコーナーです。

「教職員の有志でこんな活動をしています」、「本学の学生や教職員が学外のイベントでこんな活躍をしています」などなど、部局としての公式ニュースとまでは言えないけれど学内のみなさんに是非お知らせしたい、そんな情報があれば、是非積極的に「噴水」のコーナーに記事をお送り下さい。

〈原稿の送付先・問い合わせ先〉

総務部広報課

E-mail：kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp

TEL：03-3811-3393 内線：22031

## 黒川 正則 名誉教授



本学名誉教授黒川正則先生は、平成18年3月16日に逝去されました。享年78歳でした。

黒川正則先生は、昭和2年11月に福井県福井市に生まれ、昭和27年3月に東京大学医学部医学科をご卒業後、同大学医学部附属病院において1年間の実地修練を修められた後、昭和28年4月から精神医学教

室に入り内村祐之教授のご指導のもと研鑽を積み、さらに生化学教室の島園順雄教授のもとで生化学的研究手法の訓練を受けられました。昭和30年6月に東京大学医学部附属病院精神科助手に着任され、昭和31年11月から1年間裁判所技官として東京家庭裁判所に出向された後、昭和32年11月には再び同大学助手に復帰されました。昭和33年7月から昭和35年1月までの間、連合王国に留学し神経生化学の研究に従事し、ご帰国後の昭和35年3月31日には東京大学から「脳白質の刺激代謝について」により医学博士の学位を授与されました。

昭和36年7月に東京大学講師（医学部脳研究施設脳生化学部門）、昭和38年4月に同部門助教授、昭和48年10月に同部門の教授に任ぜられました。以来、昭和63年3月31日定年により退職するまでの14年余の間、同部門の主任教授として我が国の神経生化学における指導者として教育・研究に率先されました。

先生は、初め脳内神経伝達物質、特にアセチルコリンの代謝研究を通じて、我が国で発見、維持されている突然変異株であるE1マウスの痙攣発生機序の解析を行い、さらにこれと関連して、大脳皮質からシナプス部のみを分離精製する方法を改良し、確立されました。また、この方法をニューロンとグリアの細胞核をそれぞれ分離精製する方法に発展させ、細胞分裂が出来ない神経細胞と活発に分裂を行うグリア細胞との違いについて研究が行われました。

引き続きニューロンの長大な軸索の形成と維持に重要な役割を果たしている軸索内輸送の実体を明らかにされ

た後、比較的進歩の遅れていた軸索内細胞骨格蛋白の輸送過程である遅い軸索内輸送の解析を精力的に行い、国内はもとより、国際的にもこの分野の開拓者の一人として、軸索内輸送研究の今日の発展をもたらす大きな原動力となりました。特に軸索内の細胞骨格蛋白の動態とその輸送機構に関する詳細な研究はよく知られており、その成果は多数の研究論文、主要な学会報告、シンポジウム、特別講演などで示され、西ドイツなどから来訪滞在した外国人研究者の指導及び共同研究にもあたって国際的研究協力にも大きく寄与されました。

先生は、このように一貫して神経生化学ことに神経伝達物質、神経細胞核及び神経軸索に関する研究に精力的に従事するとともに、昭和37年度以来同大学大学院医学系研究科を担当し、医学系大学院生の教育及び後進の育成に努められました。また、昭和46年以来大学院理学系研究科の授業も担当し、理学部における生物系大学院教育に大きく貢献されました。この間に大学院医学系研究科委員会委員、同研究科第二基礎医学課程主任、大学院化学系連絡委員会委員を務められ、同大学大学院の管理運営にも尽力されました。また昭和59年4月から2年間、医学部脳研究施設長を併任し、同施設の管理運営に意を注ぎその発展に大きく寄与されました。

先生は、定年退職後の昭和63年4月より明治薬科大学教授に就任し、平成3年3月まで3年間、同大学の薬学教育に尽力されました。さらに平成3年4月から平成10年3月まで東京都精神医学総合研究所長として、東京都における医学研究の推進、特に精神疾患の解明に取り組み、精神医学研究の発展と国際交流推進に大きく貢献してこられました。

このように、先生は長年にわたり、本学における医学の教育及び研究に尽力され、また脳の生化学的研究のパイオニアとして国内外における神経生化学の普及に貢献されました。

先生のご逝去は、精神現象を含む脳神経活動の分子基盤の解明をめざす後進の医師・医学研究者・脳科学者にとって大きな悲しみです。ここに長年に亘る先生のご指導に心から感謝するとともに、謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

(大学院医学系研究科・医学部)

## 関口 忠 名誉教授



本学名誉教授関口忠先生には病气ご療養のところ去る平成17年12月12日ご逝去されました。昨秋の終わりまで先生はお元気でご活躍されておられましたので、急なご逝去に痛惜の思いを深くしております。

先生は大正15年5月3日山形県米沢市にお生まれになり、昭和24年3月東京大学第一工学部電気工学科をご卒業、同年4月同大学大学院特別研究生となられ、昭和28年4月東京大学電気工学科助教授、昭和38年6月教授にご昇進、さらに昭和41年4月からは大学院理学系研究科教授も兼任されました。昭和62年3月末日東京大学を退官された後、同年4月より横浜国立大学工学部教授となられ、平成4年3月末日をもって同大学を定年退官されました。この間、昭和31年4月には東京大学より工学博士の学位を授与されました。また昭和31年8月から昭和34年2月までイリノイ大学工学部電気工学科客員研究助教授、また昭和48年10月から54年9月まで、当時の名古屋大学プラズマ研究所客員部門教授を併任されました。昭和62年6月には東京大学名誉教授の称号を授与されておられます。

先生は生涯にわたり、電気工学に関連した電磁流体プラズマ理工学、および核融合理工学の分野において教育・研究を続けてこられました。中でも学位論文となったマイクロ波三極管における電子アドミッタンスの研

究、電磁流体直接交流発電機の研究、高電流密度不均一磁界超伝導マグネットの研究、磁界中直流放電におけるヘリカル不安定の研究、静電三探針型プラズマ計測法の研究、モジュールコイル型ヘリカル磁気閉じ込め方式の研究、さらにライフワークとして取り組まれた高出力パルスレーザーを用いた高温高純度プラズマ生成技術とそれを活用した高性能磁気プラズマ閉じ込め方式の研究、など、研究の核であった核融合理工学のみならず関連する領域でも卓越したご業績をあげられてこられました。

先生は高いご見識に加えて実直かつ気さくなお人柄によって多くの研究者、技術者の育成に献身されました。また(社)電気学会、(社)プラズマ・核融合学会、(社)低温工学協会等の会長を歴任されるなど、電気工学およびプラズマ核融合関係の諸学協会、諸研究機関、官公庁の各種委員会等の活動を通して核融合エネルギー研究開発を中心として指導的お立場で多くの貢献をされてこられ、さらに、国際原子力機関IAEAの核融合研究評議会日本政府代表委員として世界の核融合研究協力推進にご尽力されました。これらにより(社)電気学会より功績賞、またアメリカ核融合研究連合特別功労賞などを受賞され、平成5年には紫綬褒章、平成10年には勲二等瑞宝章など多数の表彰を受けておられます。

昨年、世界の核融合研究者の悲願であった国際熱核融合実験炉ITERの建設決定がなされましたが、この国際巨大プロジェクト推進にご尽力されてこられた先生は、その完成の姿を御覧になることを大変楽しみにされておられるご様子でした。ここに謹んでご冥福をお祈り申し上げます。なお先生は平成18年1月に正四位に叙されたことを申し添えます。

(大学院工学系研究科・工学部)

## 中澤 正治 教授



中澤正治教授は、平成18年3月10日午前11時13分、心不全のため逝去されました。享年61歳の若さであり、また、あまりに突然のことでした。通夜、葬儀・告別式は上野の徳雲会館で執り行われ、生前の中澤先生の人徳を示すように多数の方々が参列されました。

中澤先生は昭和19年7月22日に広島県にお生まれになりましたが、幼少の頃に愛知県知多郡南知多町へ移られ、以来、昭和38年に半田高校をご卒業になられるまで、知多半島にて過ごされました。昭和38年には東京大学教養学部理科一類に入学され、その後、理学部物理学科へ進学されました。卒業後は、特許庁においてアインシュタインの成し遂げたような物理学の研究をなさることを目指されたということで、国家公務員試験上級試験に合格しておられましたが、日本の原子力工学を確立するために東京大学へ残られる道を選ばれ、昭和42年に東京大学工学部助手に就任されました。その後、昭和52年には東京大学工学部附属原子力工学研究施設助教授に昇任され、昭和62年には東京大学工学部教授に任ぜられ、原子力工学科放射線計測学講座を担当されました。この間、昭和53年1月には東京大学より工学博士の学位を授与されています。先生は長年にわたり、放射線計測の第一人者として広汎な領域において独創的な研究をなされてこられ、多数の学生に慕われつつ、ご在任期間38年間の長きにわたり、本学の教育と研究に多大な貢献をなされてこられました。

先生のご研究は、放射線計測学の基礎から応用まで幅広い範囲におよびます。中性子場の計測法の研究では、He-3ガスを用いたスペクトロメータや放射化箔を用いた中性子スペクトルの高精度測定を行い、測定データの誤差評価をもとにした計算コードの開発などを進め、真のスペクトルを推定するアンフォールディング手法の確立に道を拓きました。また、レーザを用いた放射線計測法を考案され、核励起レーザの研究で優れた成果を上げられました。さらに、シンチレーティング光ファイバによる放射線分布計測、光ファイバセンサを用いた炉内温度分布計測、レーザ共鳴イオン化分光を用いた放射能計測

など、次々にアイデアを提案され、これらは現在、光学式原子力計測という独自領域を築くに至っております。また、先生は、超伝導体を用いた放射線検出器の将来性に注目され、ジョセフソン接合を用いた放射線検出システムの開発では、X線のエネルギー分解能で世界最高性能を得る一方、日本国内に点在していた超伝導体を用いた放射線検出器の開発グループをまとめることに腐心し、国内の研究協力体制を構築し、活発な研究活動がなされるきっかけを作った点でも大きな功績がありました。

また、国際電気標準における活動では、IEC/TC45において日本の代表者として活躍なさいました。国際標準の確立のためには対応する技術を基にして、さまざまな問題を解決していく必要がありますが、先生の人柄が信望を集めたおかげで、円滑に意見集約をなされました。学会関係では、応用物理学会放射線分科会幹事長、電気学会原子力技術委員会委員長、原子力学会放射線工学部会、日本アイソトープ協会理事、原子力安全研究協会理事、などとして、日本の放射線応用分野の指針を作られ、また、育成されていかれました。先生のこうしたご業績に対して、昭和63年と平成14年の2度にわたり日本原子力学会賞を受賞されています。また、東京大学の運営にも指導力を発揮してこられました。東京大学放射線安全委員会委員長在任時には、放射線計測学の世界的な第一人者としての高いご見識を背景に、放射線に関する安全管理の総括・監督という重責を果たされました。現在、東京大学として新たな展開をみせている柏キャンパスの新大学院研究科創設担当アドヴァイザーも務められました。平成15年4月には東京大学原子力研究総合センター長に就任され、二年間にわたりその運営にたずさわられたのち、平成17年4月には原子力研究総合センターを改組し、工学系研究科原子力国際専攻ならびに原子力専攻(専門職)を立ち上げられました。

先生は、時代を超えて常に新しいものを見つめ、いつも若々しくあられました。また学生を可愛がられ、学生の自主性を重んじられ、時には歯がゆく思われたらうときにも暖かく見守られ、鋭くかつ適切なアドバイスを下さいました。先生の優しさを思い、先生と共にあった日々を思い、これからも先生を必要としていた多くの人々のことを思うとき、あまりに突然に訪れたご逝去は、誠に痛惜の念に堪えません。ここに謹んで哀悼の意を表し、衷心より先生のご冥福をお祈り申し上げます。

(大学院工学系研究科・工学部)

平成18年4月1日付で、広報委員長が交代しました。新委員長、および退任した委員長よりご挨拶いたします。

### 広報委員長就任の挨拶

#### 「外に対する広報・内に対する広報」

広報委員長 佐久間 一郎

このたび広報委員長を拝命いたしました佐久間一郎です。どうぞよろしくお願いいたします。2003、2004年度、国立大学法人化前後の2年間広報委員長を拝命しており、2度目の担当ということになります。学内広報では前回退任の挨拶として「2年間の任務を通じて、大学で行われていることを適切に社会に発信することの重要性和その難しさを改めて認識いたしました。」と申し上げました。いろいろ反省すべき点も多く、広報活動の難しさを痛感した2年間でありました。今回回らずも再度広報委員長を務めるにあたり、前回の反省もふまえて、広報業務を円滑に進めるべく精一杯努力する所存です。

濱田理事、大木前広報委員長の下、広報室においては、前回在任当時検討するにとどまっていたさまざまな広報活動がひとつひとつ実現されていると伺っております。これらの活動を継続して推進し、優れた知的活動の宝庫である東京大学の諸側面を社会に対してわかりやすく広報し、社会のよりよい理解を得るとともに、社会に対してある種の良い影響を与える「外に向かっての広報」の一層の充実を図りたいと考えております。

一方、1年間部局にもどり一教員として全学広報活動を眺めてみて、前回広報に従事していた際に繰り返し広報室にて議論されていた、学内教職員の横断的な連携を促進する学内への情報発信の重要性を再認識いたしました。この点についても広報室は既に種々の新しい試みを開始しています。この「内に対する広報」も一層推進する努力をしていきたいと考えております。

ご支援ご協力のほどをお願い申し上げます。

#### 「広報委員長退任にあたって」

前広報委員長 大木 康

平成17年度の一年間、広報委員長の大任を担い、われながら頼りない委員長であったが、何とか任期を全うすることができ、ほっと胸をなでおろしている。これはひとえに、大学本部並びに各部局のみなさまによるご協力のおかげと、まずは心から感謝申し上げたい。

小宮山新総長の就任にはじまり、反日デモ直後の北京でのUTフォーラムの開催、北京代表所開所式、アクションプランの公表、学術俯瞰講義、また産学連携等による複数の大規模研究教育プロジェクトの立ち上げなどなど、次々と繰り出された新しい試みの現場に立ち会い、法人化を迎えた東京大学が、たしかにこれまでとはちがった世界を築きつつある様子を実感できた。

広報体制についても、たまたま私の知る数年前の状況と比べ、格段の充実ぶりを見せている。学問の世界に専門分野があり、専門家がいるのと同じように、広報一事についても、やはり「餅屋は餅屋」であって、専門家が広報の一員として常時勤務し、スタッフを支えている状態はとてもすばらしいと思う。

とはいっても、まだまだ改善すべき問題は山積みである。一つだけ例を挙げるならば、ホームページ。現在のホームページは、担当委員の涙ぐましいまでの献身的努力の成果である。だが、それでもある会社が調査した大学ホームページランキング（こういう資料の存在自体、はじめて知った）によれば、東京大学のホームページは、残念ながらいまだ上位に位置しているとはいえない。東大広報のますますの発展を心から祈念したい。

最後に私事ながら、平成15年度、法人化準備の年に総長補佐をつとめ、翌年は広報副委員長、そして17年度の委員長と、この三年間、自分なりに東大のためにかなりの奉公をしたと思っている。特にこの一年間、委員長の仕事は、得難い経験であったとはいえ、種々の会議に出席し、学内の行事という行事に参加し、何か問題が起これば、それに対応しなければならない、なかなか「時間食い」の仕事であった。多くはラボ単位で研究を進めている理系の場合はいざ知らず、基本的に個人プレーで研究しているわれわれ文系の教員にとって、これは相当つらいのである。東京大学の教職員はみな有能なわけだから、こういった仕事は、みんなが交替でやればよい。これからは、自分の研究成果を示すことで、東大のために貢献できればと思っている。

# EVENT LIST

行事名	日時	場所	連絡先・HP等
先端医療開発研究クラスター（第2回）ナノバイオ・インテグレーション研究拠点合同シンポジウム ※27ページ参照	4月21日（金） 18:00～	駒場キャンパス 数理科学研究科大講義室	※予約制 医学部附属病院先端医療開発研究クラスター事務局 TEL: 03-5800-9188 FAX: 03-5800-9193 Mail: pr@adm.h.u-tokyo.ac.jp
理学部 第9回公開講演会開催のお知らせテーマ「理学研究のさまざまな面白さ」 ※28ページ参照	4月21日（金） 18:00～	駒場キャンパス 数理科学研究科大講義室	大学院理学系研究科・理学部 TEL:03-5841-7585 http://www.s.u-tokyo.ac.jp/pl9/
国際ワークショップ文科省特定領域：東アジアの海域交流と日本伝統文化の形成「中近世東アジア貨幣史の特殊性・共時性とその貨幣論的含意」	4月24日（月） 9:15～	山上会館001号室	東洋文化研究所 黒田明伸 kuroda@ioc.u-tokyo.ac.jp http://www.ioc.u-tokyo.ac.jp/
国際ワークショップトヨタ財団研究助成：世界史にみる貨幣流通の非均質性、補完性についての研究—自律的で競争的な貨幣システムの可能性を探る	4月25日（火） 9:30～	山上会館001号室	東洋文化研究所 黒田明伸 kuroda@ioc.u-tokyo.ac.jp http://www.ioc.u-tokyo.ac.jp/
CREP月例セミナー関税同盟への選択 一戦後ヨーロッパにおける自由貿易圏構想—	4月25日（火） 15:00～	社会科学研究所大会議室	社会科学研究所 CREP事務局 E-mail:crep@iss.u-tokyo.ac.jp
生涯スポーツ健康科学研究センター開設記念式典・シンポジウム	4月26日（水） 14:00～	柏キャンパス総合研究棟6階大会議室	生涯スポーツ健康科学研究センター TEL:04-7132-3979 FAX:04-7132-4160 E-mail:kobayashi@k.u-tokyo.ac.jp
シンポジウム「私はどのようにして専門分野を決めたか」	4月28日（金） 16:30～	教養学部18号館1階ホール	教養学部進学情報センター 電話：03-5454-6187 Email: agc@park.itc.u-tokyo.ac.jp
行事名	開催期間	場所	連絡先・HP等
「重井陸夫博士コレクション ウニの分類学」展	10月15日（土）～ 4月16日（日）	総合研究博物館本館	総合研究博物館 ハローダイヤル 03-5777-8600 http://www.um.u-tokyo.ac.jp
特別展示『アフリカの骨、縄文の骨—遙かラミダスを臨む』展※1326号参照	11月26日（土）～ 4月16日（日）	総合研究博物館本館	総合研究博物館 ハローダイヤル 03-5777-8600 http://www.um.u-tokyo.ac.jp
総合研究博物館小石川分館驚異の部屋—The Chambers of Curiosities	3月9日（木）～	総合研究博物館小石川分館	総合研究博物館 ハローダイヤル 03-5777-8600 http://www.um.u-tokyo.ac.jp/annex/
第104回（平成18年春季）東京大学公開講座「人口」 ※1331号参照	4月1日（土）、8日（土）、22日（土）、5月13日（土）、20日（土）	大講堂（安田講堂）	（財）東京大学総合研究会 担当：徳久 TEL:03-3815-8345 FAX:03-3816-3913 http://www.u-tokyo.ac.jp/gen03/d04_01_01_j.html
第33回生研イブニングセミナー「情報エレクトロニクスの基礎と応用」 ※1333号参照	4月14日（金）～6月30日（金）18:00～（5月5日、5月26日、6月2日を除く各金曜日）	生産技術研究所総合研究実験棟（An棟）	生産技術研究所 総務課広報企画係 TEL:03-5452-6017～8 FAX:03-5452-6073 http://www.iis.u-tokyo.ac.jp/announce/
高校生のための金曜特別講座（夏学期）	4月14日（金）～ 7月7日（金）	教養学部11号館2階1106教室	http://high-school.c.u-tokyo.ac.jp/index.html
法学部連続講演会「高齢化社会と法」 ※28ページ参照	5月13日（土）、6月17日（土）、7月15日（土）	法学政治学系総合教育棟101教室（通称：法科大学院ガラス棟）	icclpbcl@j.u-tokyo.ac.jp FAX.03-5805-7143



## ご意見・ご感想投稿大募集！

UTカフェは読者コメントを掲載するコーナーです。「学内広報」に掲載された記事に関するご意見・ご感想をはじめ、学内の様々な事柄に関して常々思っていることなどを、気軽にお寄せください。

投稿はEメールで受け付けます。メールの本文に以下の項目を記入し、下記アドレスまでお送りください。メールの件名は「意見」としてごさい。誌面への掲載はペンネーム・匿名が可能ですが、連絡用として投稿の際には氏名・所属をご記入ください。

### <投稿先メールアドレス>

kouhou-ex@adm.u-tokyo.ac.jp

### <記入項目>

- ①氏名・所属 ②連絡先電話番号
- ③本名・匿名・ペンネームの希望
- ④タイトル（20字以内） ⑤本文（300字以内）

### 「東大川柳」も同時募集

「UTカフェ」では、東京大学をテーマにした「東大川柳」も同時募集します。優秀作は不定期で「UTカフェ」に掲載します。川柳の投稿の際には、メールの件名を「川柳」とし、④に川柳をご記入ください（⑤はなし）。

# Contents

## 特別記事

- 02 今年度役員の紹介
- 06 平成17年度卒業式
- 09 平成17年度学位記授与式
- 12 平成17年度第2回東京大学総長賞授与式を  
挙

## NEWS

### 一般ニュース

- 14 部局長の交代
- 14 新部局長紹介
- 15 部局長退任の挨拶
- 17 「業務改善提案」に係る表彰式開催
- 17 潜水作業中の死亡事故についての全学調査  
委員会報告書作成

### キャンパスニュース

- 19 第2次学力試験（後期日程）、外国学校卒業  
学生特別選考の合格者発表

### 部局ニュース

- 24 医学部附属病院管理・研究棟及び外来診療  
棟のライトアップ点灯式が行われる
- 24 教育学部附属中等教育学校で「2年生総合  
学習発表会」開催
- 25 第20回社会科学研究所シンポジウム「『失わ  
れた10年』を超えて」を開催
- 25 岡部篤行教授、イラン政府より国際イヤー・  
オブ・ザ・ブック賞を授与される

## コラム

- 26 Flags運動部紹介 No.12
- 27 調達本部です 第6回

## INFORMATION

### シンポジウム・講演会

- 27 先端医療開発研究クラスター（第2回）ナ  
ノバイオ・インテグレーション研究拠点合  
同シンポジウム
- 28 法学部連続講演会「高齢化社会と法」開催  
のお知らせ
- 28 理学部 第9回公開講演会開催のお知らせ

## お知らせ

- 29 「教養学部報」第492（4月5日）号の発行  
——教員による、学生のための学内新聞——

## 訃報

- 30 黒川正則名誉教授
- 31 関口忠名誉教授
- 32 中澤正治教授

## 33 広報委員長の交代

## 34 EVENT LIST

## 淡青評論

- 36 「勝ち組」「負け組」

### ◆表紙写真◆

卒業式風景（6ページに関連記事）

## 編集後記

3月4月は年度がわりで教職員は何かと忙しい季節。しかしながら、喜びもありますね。卒業式、学位記授与式、学部・大学院の入学式……これらの神聖なる儀式は大学にとって欠くべからざるもの。かくいう私も、本学で働き始めてから、今回、初めてこれらの式を観て、敬虔なる気持ちになるとともに感動を覚えました。卒業生よ。そして、新入生よ。皆さんの新たなる門出に栄光あれ。ほら、新緑の季節がもうそこまで来ていますよ。 (シ)



七徳堂鬼瓦

## 「勝ち組」「負け組」

「勝ち組」「負け組」という言葉が広く使われるようになって久しい。はじめのうちは流行語特有の抵抗感もあったが、今ではすっかり定着してしまっ、この言葉を一切使わずにいるのは難しいくらいになっている。

ところで、ある年齢以上の人たちは覚えているはずだが、この言葉はかつては全く違う意味で用いられていた。簡単に言えば、太平洋戦争終結後に在ブラジル日系人の間で、日本敗戦という事実を認める「負け組」とそれを拒否して日本が勝利したはずだと信じる「勝ち組」の争いが起きたというのが、この言葉の由来である。三省堂の『戦後史大事典』によれば、この意味での「勝ち組」「負け組」の争いは1960年代まで続いていたとのことだし、この事典は1991年初版の後、何回か版を重ねて今日に至っている

から、こうした用語法が意識されていたのは、それほど遠い昔のことではない。

本来の意味からかけ離れて使われているからけしからんなどと言うつもりはない。言葉というものは常に流動し、変化していくものである。もっとも、他者とのコミュニケーションを大事にしようとするなら、いつのまにか何とはなしに用法が違ってしまうというのではなく、意味変化のプロセスについて自覚的であろうとする姿勢が必要ではないかと思うが、それはともかく、言葉の変化自体は不可避であり、それを押しとどめるべきだなどと考える必要はない。

ただ、この言葉の場合、意味の違いの方が極端であり、今日の用法を聞きながら古い用法を思い出すと、どこことなく皮肉な感じがして、微苦笑を誘う。わが世を謳歌しているはずの「勝ち組」が実は幻想にしがみついているだけではないかとか、「負け組」というのは苦い真実をきちんと見つめている人のことではないかなどと考えると、ものの見え方が多少違ってくるような気がする。

ところで、本学の教員および学生は、現役であれOB・OGであれ、どちらかという「勝ち組」に属するとみなされることが多いようである。それはそれでめでたいことなのだろうし、大学も競争の波にさらされる今日、「負け組」に転落せずに「勝ち組」の座を確保するための方策を真剣に考えなくてはならないのかもしれない。しかし、世間で「勝ち組」と思われているものも、その「勝ち」が実は幻想的なものだったり、気づかれにくい「負け」の要素を潜在させたりしているということがあるのではないか——そんなことをたまには考えてみるのも、全く無意味ではないように思われる。現在進行中の大学改革が、価値観の画一化を暗黙に前提したひたすら「勝ち組」追求になってしまわないことを祈りたい。

(付記)。この小文の原稿は2005年末に書かれた。2006年になって「勝ち組」「負け組」をめぐる議論がかまびすしくなっているが、小文はそれを反映しているわけではない。

塩川 伸明 (大学院法学政治学研究科)

(淡青評論は、学内の教職員の方々をお願いして、個人の立場で自由に意見を述べていただく欄です。)

No. 1334 2006年4月12日  
 東京大学広報委員会

〒113-8654  
 東京都文京区本郷7丁目3番1号  
 東京大学総務部広報課  
 TEL: 03-3811-3393  
 e-mail: kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp  
 http://www.u-tokyo.ac.jp

この「学内広報」の記事を転載・引用する場合には、事前に広報委員会の了承を得、掲載した刊行物若干部を広報委員会までお送りください。なお、記事についての問い合わせ及び意見の申し入れは、総務部広報課を通じて行ってください。